

社団法人日本山岳会

創立100周年記念事業

「中央分水嶺踏査登山」

—— 会報「山」に見る経緯と記録

100周年記念事業の体制……………	藤本慶光	2
「中央分水嶺踏査登山」について……………		
実行委員会委員長	石田要久	4
支部の活動状況……………		
「中央分水嶺踏査登山」本格スタート	藤本慶光	5
シンポジウムの報告……………		
科学委員会・米倉久邦		6
分水嶺担当者会議の報告……………	踏査委員会・宮津八一	8
100周年記念事業の総括報告……………	藤本慶光	9
中央分水嶺踏査登山活動報告……………		
熊本支部	グリーン上が分水嶺! (本田誠也)	10
北海道支部	全長千苜、長く厳しい挑戦! (鈴木貞信)	12
丹水会	山と人とのかわりのテーマも (泉 久恵)	12
北九州支部	中国山地低山の厳しさを実感! (板倉健一)	14
静岡支部	大池峠で山梨支部と情報交換会 (山内眞行)	14
秋田支部	高齢化を乗り越えて!! (佐々木民秀)	13
東海支部	分水嶺の四季 (堀 文昭)	16
山形支部	先人の面影想ふ分水嶺 (渡辺 誠)	16
北海道支部	公募登山報告 (宮津八一)	15
緑爽会	踏査中、思わぬ収穫も (横山 隆)	18
山げら	悪戦苦闘の9時間 (鈴木裕代)	18
つくも会	締めくくりは温泉で (柴山信夫)	17
科学委員会	田代・帝釈、踏査頭采!! (向野鶴彦)	17
東九州支部	自衛隊演習場内を踏査!! (飯田勝之)	20
越後支部	三國峠の打ち上げ式目指して!! (横山征平)	19
福井支部	老将に思いを馳せる分水嶺 (宮本数男)	19
福岡支部	山城と修行者を追って (浦 一美)	22
関西支部	支線へつなぐ分水嶺 (金井良碩)	22
山梨支部	ギヤラリーは、ゴルフアース (坂本 桂)	21
アルパインスケッチクラブ		
スケッチブックに分水嶺 (沼田・富樫記)		24
藪漕ぎが残った (日出位洋太郎)		24
藪の殿座を踏査 (佐藤充信)		23
000会		
夏・春の上信国境を行く (岡田尚武)		23
01会		
穂の結まつた分水嶺 (高橋二義)		26
宮城支部	神通川と木曾川の分水嶺を歩く (山田信明)	26
富山支部	今、分水嶺は最南端の佐多岬へ (児島美照)	25
宮崎支部	津軽半島を行く (清野 宏)	28
青森支部	風雪の中15時間 (岡本明男)	28
石川支部	「ロマン」と「ゲーム」としての分水嶺 (横田和雄)	27
京都支部	山岳地理クラブ 線の分水嶺で終わらず (遠山元信)	30
山の自然学研究会	夏が来れば思い出す…… (関 清)	30
三水会	熊と遭遇、雷と響に追われて (塩澤 厚)	29
九五会	浅間山噴煙を眺めながら (手島一郎)	29
岩手支部	中央分水嶺 この2年 (松田和宏)	32
山陰支部	藪から掘り出した分水嶺 (藤井信一郎)	32
岐阜支部	足かけ3年にわたる中央分水嶺踏査完了 (高木基徳)	31
福島支部	俺よりひだいヤブ! (武藤伸彦)	34
信濃支部	大物コースに脱帽 (中野和郎)	34
休山会	趣異なる山行を満喫 (鈴木秀郎)	33
中央分水嶺踏査委員会事務局より	(森 武昭)	33
中央分水嶺踏査完了!		
信濃支部との共催でファイナル踏査実施		
中央分水嶺踏査委員会・森 武昭		36
「中央分水嶺踏査」事業完了!		
報告書出版記念フォーラム開催		
(向野鶴彦、森 武昭)		37

100周年記念事業の体制

藤本 慶光

日本山岳会は2005年10月に創立100周年を迎えるが、それを記念する行事をどのような体制とどのような内容で実施するかについて議論を重ねてきた。

このほど大要が明らかになったので報告したい。10月の理事会で正式に決定し、10月25日の評議員会に諮り、その後の理事会、評議員会、支部長会の合同会議を経て正式に立ちあがる。

創立100周年記念事業委員会

理事会の下で記念事業の推進を総括する。現会長、副会長、会長経験者、副会長経験者の若干名で構成する。(委員長・平山善吉、副委員長・芳賀孝郎、平林克敏、橋本明、委員・山田二郎、村木潤次郎、斎藤淳生、大塚博美、宮下秀樹、小倉茂暉、松田雄一)

□記念事業委員会の下に次の6つの委員会を設ける。

広報委員会 広く会員に100周年記念事業の進捗状況を伝え、全員参加をよびかける。会報『山』に「100周年ニュース」のページを設け、さらにインターネット上でもニュースを流す。(委員長・今村千秋)

募金委員会 100周年記念事業が円滑に実施できるように広く募金をよびかける。会員の皆さんに記念事業の趣旨に賛同いただき毎年3000円、3年間の募金を呼びかけると同時に、一般企業に対してでも募金に応じていただけよう努力に働きかける。(委員長・芳賀孝郎、副委員長・費田統亜)

財務委員会 記念事業推進にあたり、募金していただいた貴重な財源が各事業の実施にあたって適正

に使われているかを十分に管理して運営する。(委員長・橋本明、副委員長・吉永英明)

長期目標検討委員会 第二世紀目に入る日本山岳会が将来どのような方向に向かって進むべきか、いかなる目標をかかえて活動していくべきかを全国的規模で議論して方向付けを行う。(委員長・田辺寿、副委員長・森武昭)

施設検討委員会 日本山岳会の所有する本部、上高地山岳研究所、図書室を、さらに一層会員の利用に便利なようにどのように変更、改善していくかを検討する。(委員長・小川武)

行事実行委員会 100周年を記念して実施される行事を有意義なものたらしめるために、各分野にわたる行事の推進を総括し、円滑な実施を実現するための調整を行う。(委員長・平林克敏、副委員長・神崎忠男、藤本慶光)

□行事実行委員会の下に次の5つの委員会を設置する。

記念史刊行委員会 日本山岳会の100年の歴史を後世に伝えるために記念史を刊行する。(委員長・芳賀孝郎)

●百年史刊行——過去長年にわた

つて作業してきた100年の歴史をまとめて通史と資料にわけて刊行する。(委員長) 松田雄一

●英文ジャーナル刊行——『ジャパニーズ・アルパイン・ニュース』の100周年記念号を刊行する。(委員長・中村保)

登山委員会 100周年を記念するにふさわしい登山を国内外で実施する。(委員長・大蔵喜福)

●海外登山——広く海外への登山隊派遣を呼びかけて積極的に支援する。(委員長・大蔵喜福、副委員長・鳥居和雄)

●中央分水嶺踏査——日本中央分水嶺を全国の支部の参加を得て、北海道から九州まで踏査する。(委員長・石田要久)

●海外トレッキング——過去の日本人が世界に残した足跡をたずねるトレッキングを広い地域で実施して全国から参加者を募る。(委員長・黒川恵)

式典委員会 100周年という記念すべき時を長く会員の記憶にとどめる式典を実施する。(委員長・藤本慶光)

●総合式典——全国の会員に広く参加を求め、国内外の関係者を招待して内容の濃い総合式典を20

05年10月15日に東京で実施する。

(委員長・神崎忠男)

● 記念映像資料——式典に参加した人々の印象に残る映像資料を会場内に展示する。(委員長・鈴木敬吾)

● 記念フォーラム委員会 100周年を記念するさまざまなフォーラムや企画展示を実施する。(委員長・朴元鍾徳)

● フォーラム——各支部で独自に実施されるフォーラムの調整を行うとともに、今後の山岳会のあり方を考えるフォーラムを全国的規模で実施する。(委員長・朴元鍾徳)

● 高尾の森——長年実施している高尾の森の記念植樹を引き続き実施すると同時に、自然保護に関するフォーラムを実施する。(委員長・篠崎仁)

● 図書展——山岳会が所有する貴重な内外の図書を、東京の「丸善」で、本会の所蔵の絵画とともに展示する。(委員長・田村俊介)

● 医療ハンドブック——登山医療に関する小冊子を作成して会員に配布すると同時に一般に販売する。医療に関するフォーラムを実施する。(委員長・野口いづみ)

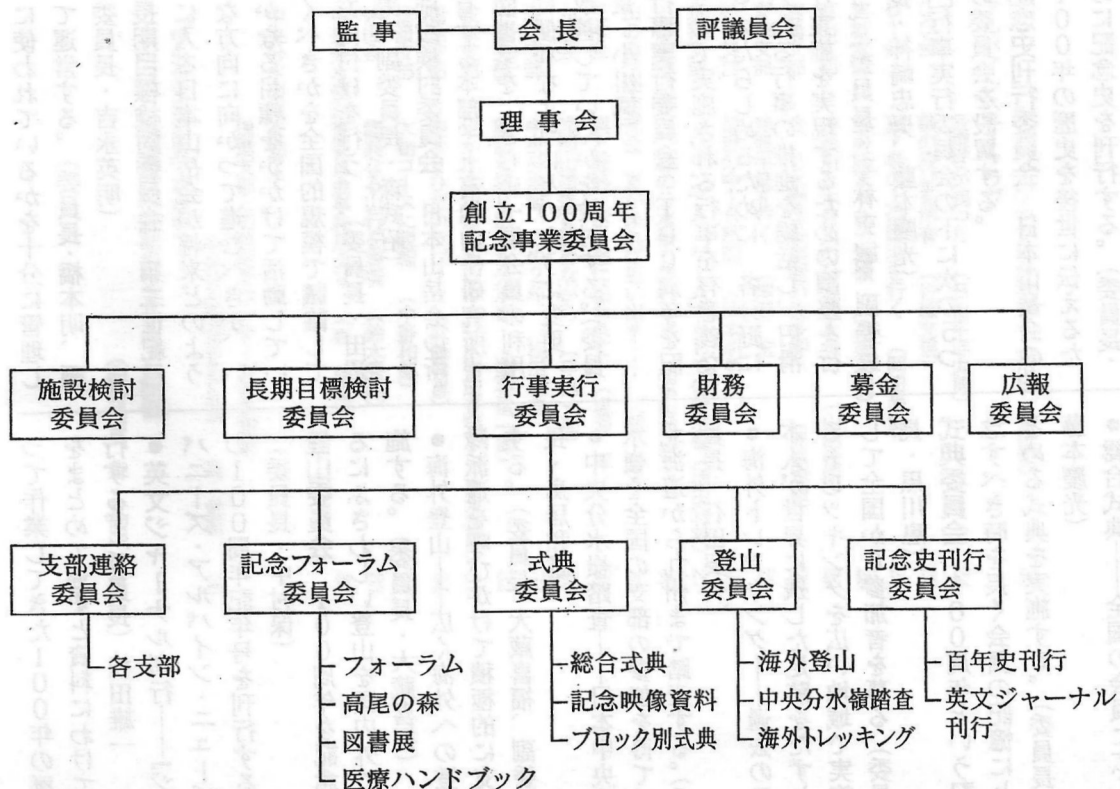
支部連絡委員会 す

べての行事に全国の支部からの積極的な参加が強くのぞまれる。かかる支部への働きかけの調整を行い、円滑な運営を図る連絡委員会を設ける。(委員長・藤本慶光)

以上述べたような各種行事の実施とあわせて、100周年を記念する特別な品物を企画制作して会員に広く頒布する。

本年度より開始した会員の皆さんによる募金については多くの方々にご賛同いただき浄財をお寄せいただいているが、記念行事をさらに充実したものにしていくためにさらに一層のご理解とご協力をいただきたいと思います。切にお願いする。

100周年記念事業推進組織



「中央分水嶺踏査登山」について

中央分水嶺踏査実行委員会委員長 石田 要久

創立100周年記念事業の主旨に沿った国内登山行事として、中央分水嶺踏査登山を実施することになった。これは、北海道の宗谷岬から九州の佐多岬まで中央分水嶺を踏査しようという試みである。JACの現状を踏まえて無理のない範囲で、ひとつの旗の下にできるだけ多くの区間をなるべく多くの会員で踏査することを目指した企画である。計画概要は以下のとおりである。

1. 目的

- (1) できるだけ多くの会員の参加
- (2) 多少なりともパイオニア的精神を生かせること (困難性を含む)
- (3) 少しでも参加者の連帯感をもてること (一本の線で結ぶ)
- (4) 今後のIT時代に相応しい企画を盛り込む
- (5) 可能であれば、その他の科学的または文化的要素を盛り込む

2. 登山計画

- (1) 各支部および首都圏の担当する区間を決定し、各区間について調査や予備的登山を通じて、次の3つに区分する

- A. 登山道が整備されていて、それほどの困難さを伴わない区間
- B. ある程度の藪こぎやザイルの使用などにより何とか行けるであろう区間、または積雪期なら行けるであろう区間
- C. とても歩行は困難な区間

実際には、A区間は100%歩き、B区間は可能な限り歩くかまたはスキーで滑り、Cは線としては省くが、途中にあるピークや峠は点として可能な限り登る。

- (2) 実際の登山は担当の各支部に委ねるが、それぞれの実情に応じて次のような方法から選択するものとする。ただし、詳細な分水嶺のルートは各支部の検討に委ねることとする。

- ① 自らの支部で全てを実施する。
- ② 支部が中心となって実行するが、実際に歩く者やサポートする者は広く会員から募集する。
- ③ 支部が中心になってやるのには負担が大き過ぎ

て難しいが、本部が中心になって実行するのであればできる限りのサポートをする。

- ④ 今回設定している期間内での実行は困難なので、支部で以前に実施した県境登山などの報告書で代用し、今回は空白区間のみ試みる。

- ⑤ 実情ではとても実行 (協力を含めて) は困難。なお、中央分水嶺が通っていない、静岡・東海・富山・石川の各支部は近隣支部との協力などの形で、当計画へ参加することを前提としている。首都圏 (本部) は、群馬県などを中心に一部区間を担当し、近く同好会などへ参加を呼びかけることにしている。

3. 山行報告

主要な点のGPSによる測定、到出発時刻、三角点の保存状況と2万5千分の1の地図との相違点 (国土地理院に委員会を通して報告する予定) などを1日の山行につきA4に1枚で報告してもらおう。提出された山行報告書は、パソコンに入力し、集大成したものを資料編として、CD-ROMで配布および保管する予定。また、この資料編をもとに最終報告書を作成する予定。

さらに、ホームページを最大限に利用し、進捗状況を常時公開する予定。

4. スケジュール案

各支部へ全体計画を送付済みであり、2月22日に各支部の担当者を招集して最終調整の会議を催し、3月末までに実施計画の最終決定を行う。4月から2005年9月まで踏査登山を実行し、その後に報告書の作成に取りかかることを予定している。

なお、本号のインフォメーション欄にも記載されているように、今回の中央分水嶺踏査登山の計画とその意義を広く周知し理解してもらうためのシンポジウムを2月21日午後開催する。また、安全登山の一助とし、かつ調査に活かしていくため今回各支部にGPSを1台配布した。同じ機種 (地図の挿入可能) のものを47,800円 (定価59,800円・送料別、税なし) で販売しているので、希望者は事務局へ申し込んでいただきたい。

「中央分水嶺踏査登山」支部の活動現況

中央分水嶺踏査実行委員会支部担当 藤本 慶光

創立100周年記念事業のひとつである「中央分水嶺踏査登山」は、全国の支部と首都圏に属する多くの会員が全面的に参画する画期的なものである。

会報『山』の1月号にその概略を紹介したが、すでに各支部においてそれぞれ活動を開始しているので、その現況をお知らせしたい。

●**秋田支部** 昨年9月28日に佐々木支部長以下15名の会員で秋田、岩手の県境の甲山分岐から峰越し林道まで踏査して、その山行報告書が昨年度の年次晩餐会で展示された。国土地理院の作成した地形図に書かれている「鹿の子の山」という山名表示が実は「鹿の子山」であること、新たに作られた林道や、すでに使われてない廃道など地図上の表記を修正しなければならないことなど、多くの収穫を得た。

GPSによる位置測定とあわせて高度の測定もしたが、地図での高度表示と異なることもあり、GPSの精度を知る上でも有益であることがわかった。

●**北海道支部** この地域は広大で、4つのグループに分けて実施すべく計画を立案中であるが、積雪期、残雪期のほうが踏査が容易であるとの視点から、本年早々に2回のトライアルを実施した。1月2日から4日にかけて新妻支部長をリーダーとして3名が宗谷岬を出て宗谷川源頭134地点まで往復踏査、1月11、12日に新妻、西野の2名がトマムR136と中央分水嶺の交点から957峰までの6kmをスノーシューで踏査した。

●**東海支部** 和田副支部長を委員長とした委員会が結成され、数次の偵察、一部区間の踏査を実施した。今回の全体の計画では、必ずしも全ルートでの完全踏査にはこだわらず、行けるとところは行くとの趣旨で取り組んでいるが、東海支部は担当区間の76kmの完全踏査を目指している。野妻峠から権兵衛平までを15の区間に分け、実施時期、リーダー、サブリーダーを決定して今春の残雪期を中心に各チームが踏査に邁進する。この企画を記念するペナントやTシャツも作成する予定である。

●**富山支部** 木戸支部長を責任者とした体制ができており、本年2月から4月までに5回の偵察調査、本踏査の日時と場所が決定した。

●**信濃支部** 中野支部長を委員長とした8名の実行委員会が既に発足し、具体的な実施計画を作成中である。

●**京都支部** 横田支部長が責任者となり5名の担当委員が決定した。

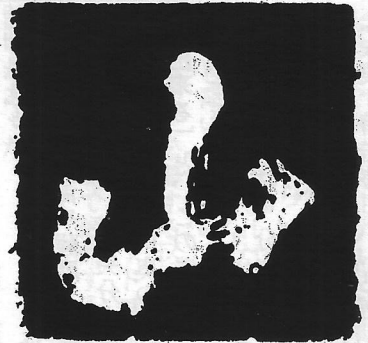
その他の支部でも相次いで担当責任者が決定、実施のための組織づくり、ルートへの検討、実施時期の設定などが精力的に行われている。

●**首都圏** 全長6000kmに及ぶ中央分水嶺を全国の支部に踏査を実施していただくべく割り当てたが、支部に属さない首都圏在住者も参加できるように、首都圏の担当区間を次の15区間とした。すなわち、甲子峠から鳩待峠までをA区間からF区間の6つの区間の首都圏1とし、三国峠(高田)から三国峠(甲府)までをAからIの9区間にわけて首都圏2とした。この計15区間を支部での活動と同じように責任をもって実施していく母体として、日本山岳会の同好会に呼びかけることにした。

同好会には、同好の士が集まって特定の目的をもって活動する同好会と、従来あった同期会が発展的に同好会になったグループもある。1月26日にそれらの同好会の代表者に集まってもらい、計画を説明した。それぞれの同好会でどの区間を担当するかを検討して、希望区間を提出してもらい、委員会で調整のうえ決定することとした。

今後は支部における活動と同様に、責任者の決定、ルート、スケジュールなどの検討実施計画の策定を積極的に行っていただきたいと考えている。

今回の計画は、日本山岳会会員のできるだけ多くの方の参画を実現したいという強い願いにより策定されたものである。一般会員の方々も積極的にいずれかの計画に参加されて、日本山岳会創立100周年をそれぞれの想いで迎えていただきたい。



2004 年 (平成 16 年)
4 月号 (No. 707)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価 1 部 150 円
URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-info@jac.or.jp

目 次

100 周年「中央分水嶺踏査登山」	
本格スタート	1
ポカラ国際山岳博物館開館式	4
アメリカ山岳会での講演	5
100 周年ニュース	8
海外の山	9
報告	10
図書・水野勉氏講演会 / 学生・	
アイスクライミング講習会 /	
事業・スキー懇親会	
東西南北	12
水越武写真展とフォスコ・マ	
ライニ氏の近況 / シュラギ	
ントワイトのパノラマ図受贈 /	
ウェストンと槍ヶ岳・日本海	
図書紹介	14
Climbing & Medicine	32
会務報告	16
テンギ・ラウ・タウ・シニア隊	17
INFORMATION	18
図書受入報告・ルーム日誌	19

▶ 日本山岳会事務 (含図書室) 取扱時間
月・火・木 …… 10~20 時
水・金 …… 13~20 時
第 2、第 4 土曜日 …… 閉室
第 1、第 3、第 5 土曜日 …… 10~18 時

創立 100 周年記念事業 「中央分水嶺踏査登山」本格スタート!

中央分水嶺踏査委員会

日本山岳会の創立 100 周年記念事業のひとつで国内登山の部の「中央分水嶺踏査登山」について

円滑な実施に向けて、分水嶺支部担当者会議を開催しました。

は、その計画概要と支部の取り組み状況について、すでに会報 704、705 号で報告しました。そして、この事業を本格的に推進するため、去る 2 月 21 日 (土) の午後、水道橋のグリーンホテルで、この企画の提案元である科学委員会との共催で、本計画の意義を深めるとともに周知することを目的として、シンポジウム「中央分水嶺踏査について」を開催しました。また、翌 22 日 (日) には、本計画の

一部準備が遅れていた支部もありましたが、各支部とも責任をもって積極的に取り組むとの意思表示があり、いよいよ準備から実行へと本格的なスタートを切ることにになりました。首都圏で担当する 2 区間についても、同好会などによる分担がすでに決まっております。具体的登山計画を持ち寄って、3 月 22 日 (月) に首都圏の担当者会議を開催しました。
今回の 100 周年記念事業は、全員参加をモットーとし、一部区

間については、会報およびホームページを通して、一般会員を対象に公募して参加を呼びかけることを予定しています。ふるって応募いただき、創立 100 周年事業に少しでも関与することによって、その意義を感じ取っていただきたいと思えます。
以下に、シンポジウムおよび支部と首都圏の分水嶺担当者会議の開催報告を記します。

◎シンポジウムの報告

■はじめに

このシンポジウムは、中央分水嶺踏査事業の一環として、国土交通省国土地理院の後援を受けて開催された。当日は、一般の参加者のほか、実際に中央分水嶺を踏査

■基調講演

講演のトップバッターは今年 1 月に院長を退任したばかりの星埜氏。専門家の立場から、山岳会の宗谷岬から佐多岬までの分水嶺踏査計画を評価、中央分水嶺の定義に多くの議論があることを紹介し

する全国各支部の代表も含めて約 200 人が参加した。
星埜由尚前国土地理院院長ら 4 人が中央分水嶺の意義や魅力などについて講演、その後のパネルディスカッションでも活発な意見交換が行われ、総延長 5 千キロに及ぶ分水嶺の踏査達成へムードは盛り上がった。
シンポジウムは科学委員会の箕岡委員が総合司会を務め、中央分水嶺踏査委員長の水田要久理事が開会の挨拶をして始まった。



シンポジウム、パネルディスカッションで本計画の意義を再確認

た。

星埜氏は「水が別れるところを分水界、海をへだてるのが中央分水嶺とすると、北海道では知床半島を北端としてもいい。本州の中央分水嶺の始まりは津軽半島か下北半島か。これは陸奥湾が日本海か太平洋、どちらの海に付属しているかで見ると決まる」と述べ、さらに瀬戸内海や薩摩半島錦江湾の例を挙げて、「中央分水嶺と簡単に言うが、面白い奥の深い議論が出来る」と、この機会に分水嶺論議を深めて欲しいと要望した。

また、星埜氏は、分水嶺は「一人々の生活や文化にも大きな影響を及ぼしている」と、その意味は単に

地理的なものにとどまらないと指摘した。

次に、分水嶺研究に長く携わり、100周年記念事業として中央分水嶺踏査を提唱した科学委員会の近藤善則委員が「分水嶺の魅力と踏査の意義」と題して登壇。

分水嶺の魅力について、地理、地学、河川、森林、文学、歴史、生活文化、交通などあらゆる分野と密接にかかわっており、登山の対象としても興味深いテーマがたくさんあると述べた。

近藤氏は、具体的なテーマを①気候や風土の境界の役割を強く感じることや、②植生、動物の観察などの自然系、③古道や峠の歴史上での役割、④源流や三角点の観察などの人文系、⑤県や市町村の境界、⑥鉄道、道路などの社会系と⑦3分類して「分水嶺とのかかわりなくして列島を論ずることはできない」と分水嶺への思いを語り、「分水嶺には登山道のないところもある。日本山岳会のパイオニア精神を活かせる唯一の国内登山、全支部の鋭意を持って臨む価値のある行事ではないだろうか」と結んだ。

北海道支部長の新妻徹氏は、実

際に踏査をする立場からの苦勞を語った。北海道支部の担当は、全体の2割にもあたる総延長1065キロ。各支部の中でもずばぬけて長い。しかも、途中は積雪期でないと歩けないような難しいところも多く、踏査達成には強いリーダーシップと全支部員の努力が欠かせない。

新妻氏は、自らの北大山岳部時代からの登山経験などを披露しながら、分水嶺の調査山行を実施していることを説明。「中央分水嶺は、千歳空港のなかを走っている。これはどうしようかと悩んでいる。す」などとユーモアを交えながら、踏査をやり遂げるとの決意を表明してくれた。

最後に『日本の分水嶺』の著者、堀谷俊さんが「中央分水嶺、ここが面白い」と題して講演、「中央分水嶺は多彩な魅力を秘めている。分水嶺をはさんでしばしば植生、気候、風景、文化が大きく異なることがある。分水嶺を越えて人、物、情報の交流が日本の歴史を陰で支えてきたといってもいい。地理、地学的にユニークなポイントが多数ある。水源や観光資源として様々な形で私たちを潤し

ている」と分水嶺研究の楽しさや意義を語った。

さらに堀氏は、「分水嶺ハンター」として自ら歩いて調べたことを踏まえて、北海道、東北、関東中部、近畿、中国、九州の各地区に分けて、分水嶺をめぐる話題やトピックスを解説、「紹介できなかつた興味深いポイントもたくさんあり、すべてを説明し尽くすことは困難。中央分水嶺の魅力の一端を感じてもらえれば本望です」と関西弁の楽しい話を締めくくった。

■パネル・ディスカッション

シンポジウムは休憩の後、「分水嶺について大いに語る」というパネル・ディスカッションに移った。最初に司会の森武昭・中央分水嶺踏査委員会事務局長が、計画内容や進捗状況を説明した。

森氏は、中央分水嶺踏査事業の目的として、①できるだけ多くの会員の参加、②パイオニアの精神を生かせる、③6千人の会員が連帯感を持てる、④IT時代にふさわしい企画を盛り込む、⑤科学的・文化的要素を盛り込む、の5点を強調、今年3月に登山計画の最終案を決定して、4月から活動を開始、来年10月の100周年記

念式典で報告をしたいと説明した。また、藤本慶光総務担当理事から、「各支部からいろいろ要望も聞いているが、それだけ皆さんの関心も高い。一般の人も参加できるように、公募する区間を決めて公開していく。NTTドコモと提携して衛星電話で通話するなどのイベントも計画している」と補足説明があった。

討論会では、星埜氏や堀氏から山岳会の事業に「協力していきたい」「頑張つて欲しい」との言葉が寄せられた。

山岳会会員や一般参加の人から「個人的に分水嶺を歩いているが、昔の道や廃道になったところが目につく。そうした道の復活や登山道を新たに造るとかの啓蒙活動をどう考えているのか」「結構な企画だが、参加するにはどうするか。具体的な呼びかけは」などの質問が出た。

また、星埜前院長には、「地理院の地図の名称と地元の呼び方が違うが、どうしてか」「地図が間違っていることがある」などの指摘が出され、星埜氏は、間違いないように心掛けているが、廃道がそのままという例もあるとし、

現場からの情報提供に協力をお願いします」と応じていた。

最後に日本山岳会の平山善吉会長が、「ぜひ、事故なしで計画を実行して欲しい。楽しい報告書ができるのを期待している」と挨拶。また、福山科学委員会委員長も、シンポジウムを100周年記念事業の役に立てていただきたいと述べ、終了した。

◎分水嶺担当者会議の報告

中央分水嶺踏査委員会

宮津 公一

2月22日(日)午前9時より、本部104室にて支部担当者会議が、前日のシンポジウム「中央分水嶺について」に引き続き開催された。各支部責任者26名、本部の中央分水嶺踏査委員側は、小倉顧問、石田理事はじめ10名と大勢の出席を得た。104室は机の二重配置となり、文字どおり立錐の余地なく、熱気あふれる審議が行われた。各支部とも、独自の考え方、諸事情もあつて、当初は消極的な意見もあつたやに聞いていたが、この日は、いずれの支部も担当区分について「任しておけ」とのご回答。どの区間とも、平均すると過半数

は登山道などなく、残雪期のみ、またはやぶこぎ専門等々の歩行困難区を抱えているにもかかわらず、支部単独、支部主体で踏査すると心強い、積極的意思表示がなされた。その上で、隣接支部との調整などの具体案が次々に提示され、すでに一部踏査を開始している支部もあつて、机上から地上へと確実に進捗していることを実感させられた。

その他、報告書の書式などについても審議が続けられ、正午前に終了。昼食後、午後からは宮崎紘一委員が講師となつてGPS(すでに各支部へ1台ずつ配布された「TopconのGPD日本語版」の使い方、納入会社の安保氏による挿入地図ソフトの紹介など、実機を使つての講習会が行われた。最後には四番町周辺の街角で「あれ! 3センチ離れてないのに〇〇秒異なるぞ」など、GPS画面を見せ合いながらの検討が進められた。

3月22日(月)18時半から本部104号室で、首都圏の分水嶺担当者会議が開催された。今回の計画の中で、福島・栃木県境の甲子峠から尾瀬の鳩待峠までと、新潟・群馬・長野県境の三国峠から群

馬・山梨・長野県境の三国峠までの2区間については、首都圏の担当として同好会(同期会を含む)に呼びかけたところ、15の会から参加申し込みがあつた。当日は、これら同好会の担当者が一同に会して、前述の地方支部の会議と同じ内容について打ち合わせた。最初に、あらかじめ実施した希望調査をもとに調整した各同好会の担当区間を確認した。

なお、空白となつた1区間については、この計画の提案元である科学委員会が担当することになつた。首都圏の担当する区間も登山道が整備されていないところが多く、各同好会とも積雪期、新緑または紅葉の時期など、それぞれの区間で最適と思われる時期を選んで山行を計画している旨の報告があつた。

これらの会議を通して、いよいよ4月から各支部とも本格的に創立100周年記念の国内登山に取り組むことが確認された。

なお、右記のGPS(4万8700円)と挿入地図ソフト(1万4000円)を購入希望の方は事務局まで、FAX、手紙またはEメールでお申し込みください。

100周年記念事業の経過報告

藤本 慶光

■マナスル登山隊

100周年記念事業として、日本人が初登頂した唯一の8000m峰マナスルに、登頂50周年記念登山隊を隊員の募集形式で派遣する計画が進められている。この計画に対して「8000m峰に対して安易ではないのか?」「危機管理の面は大丈夫か?」などの声が寄せられている。

こうした声を受けて先日、平山会長を中心に常務理事会を開いて事情を聴取した。その結果、計画どおりに推進しながら、隊員の応募状況や隊員構成などをみて、「100周年記念事業」や「マナスル登頂50周年記念登山」の冠をつけるかどうかを最終的に判断する方針を改めて確認した。

■記念事業計画書の作成

今回の記念事業の推進に当たっては、多くの関係方面に援助をお願いしなければならないが、その際簡潔に計画概要を知っていただくための計画書を作成した。A4判見開き6ページのカラー印刷で、会長挨拶、推進組織、事業概要、事業費と募金概要などの構成になっている。末尾にポケットをつけてここにそれぞれに必要な資料や募金依頼書などを挿入する。外部への募金依頼などにおおいに活用していただきたいので必要な方は本部に申し出てほしい。

■創立100周年記念事業委員会の開催

今回の記念事業の推進の中心となる上記の委員会を開催し、行事内容の経過報告、活動予算の概要説明、募金状況の報告などを行い、意見をいただいた。

■財務委員会の開催

記念事業を推進していくうえで必要な活動費についての収支計画が検討された。総額8500万円の活動費は、会員からの寄付、一般からの寄付、長期積立金の取り崩し、物品の販売でまかなわれるが、未確定な部分が多いので予備費を計上した。

海外登山1000万円、中央分水嶺踏査450万円。百年史出版に1800万円などの大枠が決定されたが、募金状況などに応じて見直しが必要となることも予想される。

■募金委員会の開催

会員募金については、1人当たり年3000円で3年で計9000円の募金をお願いし、すでに第1年度が終了し

たが、約3分の1の会員の方々にご協力をいただいた。まだ募金に応じてくださっていない方も多いので、平成16年度の総会通知の発送の際、初年度に募金して下さった方々への2年度以降のお願いとは別個に初年度からの募金を再度お願いすることにした。

一般募金については当今の厳しい経済状況に鑑みて大変困難なことが予想されるのでできるだけ大勢の会員の方々のお力を借りて積極的に多方面にあたることとした。実施する行事に冠をつけて大口の寄付をいただく可能性も議論された。

寄付金の免税処置については、日本山岳協会を通じて体育協会枠の取得を申請することとした。

■長期目標検討委員会

今回の100周年を機に将来の日本山岳会はいかにあるべきかを考える当委員会が数度にわたって開催され、活発な議論がなされている。成案ができた段階で理事会に提案されて可能な部分は迅速に着手することが検討されている。

■ブロック別記念式典の実施

100周年を祝う記念式典については、東京において実施される総合式典とは別個にいくつかの支部をブロックにまとめて各地で実施するが、すでに九州ブロック、東北ブロック、北陸、京都、岐阜ブロック、山陰、広島ブロックなどのブロックでの開催が決定されている。最終的には全国で8ないしは9のブロックで記念式典が開催される予定である。

■中央分水嶺踏査

全国25支部の全てと首都圏の同好会が担当して北の宗谷岬から南の佐田岬までの中央分水嶺を踏査する企画はすでいくつかの支部で着手されている。支部や同好会に属していない会員の参加については、いろいろ困難な条件があり、すべての地域で受け入れることはできないが、いくつかの区間での受け入れが検討されていて、一般に公募される。

登山計画は25の支部、17の同好会全てから提出された。ホームページは既に稼動しており、国土地理院から電子国土の使用支援を受ける予定である。

先般NTTドコモの協力で衛星通信を使用した映像と音声の交信実験が陣馬山と本部集会室の間で行われてほぼ期待した結果を得たので今後分水嶺踏査の際に実施する予定である。

創立 100 周年記念

中央分水嶺踏査登山活動報告

総延長：5000km
踏査率：13% (2004.5.31現在)

中央分水嶺踏査委員会

「会員の全員参加をモットー」とする日本山岳会創立100周年記念事業のひとつ「中央分水嶺踏査登山」。今年2月のシンポジウムを機に本格スタートした同計画は、北は北海道宗谷岬から南は九州佐多岬まで全長約5000*の中央分水嶺を踏査するというもので、27に分けられた区間を25地方支部と首都圏(2区間を同好会等が担当)で分担し、踏査を行っている。登山活動実施期間は4月から来年10月まで(一部は再来年4月まで)となっており、経過報告を兼ね、各支部等の踏査状況等を今月号から隔月で順次紹介していくことにする。なお、表題の踏査率は、山行報告書が提出された踏査済み区間の距離を総延長の割合で示したものである。



2004年(平成16年)
7月号(No. 710)
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価1部 150円
URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-info@jac.or.jp

目次

中央分水嶺踏査登山活動報告	1
海外の山	4
報告	5
事業・若葉山行/自然保護・	
自然観察会/丹水会・第46回	
例会/山げら・春笑うやまげ	
ら	
支部だより	9
福岡/信濃	
Climbing & Medicine	35
図書紹介	11
『信州大学山岳科学総合研究	
所年報第1号』『山に学ぶ	
山と生きる』『The Himalayan	
Journal Vol.59, 2003』	
会務報告	12
ルーム日誌・新入会員・図書	
受入報告	13
INFORMATION	14

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 10~20時
水・金 13~20時
第2、第4土曜日 閉室
第1、第3、第5土曜日 10~18時
ルーム夏期休業日 8月14~22日

熊本支部

グリーン上が分水嶺!

熊本支部が担当する中央分水嶺は、熊本・大分県境の九重山麓の本高原から、熊本・宮崎県境の白髪岳南麓まで南北180*にわたり、GPSによる測定ポイントが122か所となる。会員の高齢化が進み、実働会員が少ない支部としては手に余る計画ともいえるが、先年、支部設立45周年記念事業として実施した「県境の山」436*踏査の実績を生かして、決められた期間内にはぜひ達成したいと考えている。

Cランクの難コースが多いが可能な限り分水嶺ラインを歩いている。4月15日の全国各紙に中央分

水嶺踏査の記事が掲載されたことから、一般の関心も高まり公募参加の問い合わせもあつた。

6月上旬の現時点で、10回にわたり約95*(担当区間の5割強)を延べ65人が歩いており、予定よりかなり早いペースである。これは、南部九州の夏場では九州脊梁山地の踏査は困難だろうと、若干予定を繰り上げて実施したからである。踏査班長・加藤功一会員の努力で、毎回多くの会員が参加し、楽しく歩いている。

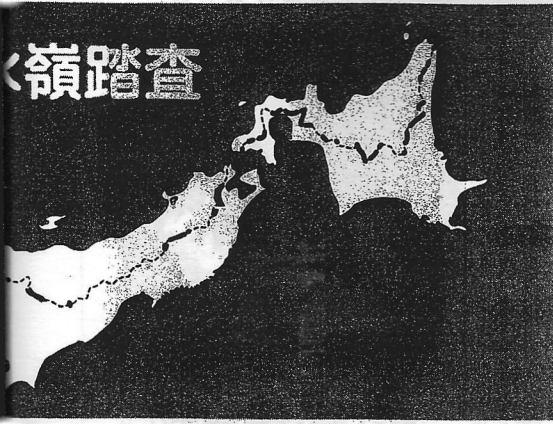
実際に歩いてみて、分水嶺の形が多種多様であることに気づいた。阿蘇外輪山ではすべて、カルデラの外縁部を通っていた。指定された三角点が分水嶺上になく、逸れていたところがいくつかあつた。高原の畑の真ん中に、三角点が鎮

座していたところもあった。里山地帯では、例外なく荒れて厄介なヤブ分けを強いられた。

傑作なのは、高森ゴルフ場の9番ホールグリーンが分水嶺になっていたこと。ホールは西側の有明海側にあったが、太平洋側にオンして、有明海側に転がすのも楽しいではないか。

5月中旬には地元のFM中九州から取材を受け、実際に歩いて加藤功一・百合子夫婦が分水嶺歩きのロマンと楽しさについて語り、5月24日午後放送された。

いま支部は、本年10月開催予定の全国支部懇談会の準備に追われており、九州脊梁山地中央部に入った分水嶺歩きは、今秋以降に再



9番グリーン上が分水嶺

開したいと考えている。

(本田 誠也)

北海道支部

全長千キロ、長く厳しい挑戦！

北海道支部は中央分水嶺全体の2割に相当する、宗谷岬から白神岬までの1065キロを受け持っている。

昨年11月30日に第1回の踏査実行委員会を開催し新妻支部長以下三役、中村実行委員長他でブロック担当と実施計画案の策定を行い、全道を道北、道東、道央東、道央西、道南の5ブロックに分けた。

このうち8割が積雪期での踏査となるため、すでに今年1月2日から踏査が開始されている。その後、踏査実施と並行して、数回の実行委員会を開催し、計画概要や踏査実績について「分水嶺踏査特集号」や定例の「支部だより」で周知徹底し、多くの会員・会友の参加を呼びかけてきた。

実際の踏査に際しては、林道の調査や事前の下見をしたり、猛吹雪のため途中で引き返したりと、冬期間は苦勞も多い山行となっているが、支部長自ら最北端の宗谷岬、最南端の白神岬の踏査を実施済みである。

道北ブロックはエスケープルートが少なく、ロングコースが多い。天北峠から上紋峠までの約36キロのように、山中3泊で中村喜吉・漆崎隆会員が踏査している。宗谷丘陵では、樹木がなく広大な地域と多くの沢が複雑に入り込んでいてルート確認に苦勞した。道東ブロックは大雪山や十勝連峰を擁し、冬期踏査は一段と厳しくナイフリッジや急斜面の通過には、常に滑落や雪崩の危険と真剣に向きあっている踏査となっている。

道央東ブロックは低山で登山道



厳しい天候下での踏査(道北の函岳頂上)

も、山行実績もなく、多くの林道が入り込んでいて踏査に時間を要している。道央西ブロックは比較的踏査しやすいルートが多く、すでに76割の踏査が完了した。道南ブロックは奥深い低山が多く、山行実績がないこと、雪融けが早いことなどから25割の進捗率となっている。また、残雪期の道南はヒグマが多く、足跡を見ながらの踏査はよくあることで、前回は親子熊に遭遇し踏査を中止して引き返した。

分水嶺踏査をしてみても、地形図と人工物(特に送電線)との相違点が散見された。普段の山行では行くことがない地元の山城を踏査

中央分水



山陰・広島支部

2支部合同キックオフ 三坂峠に固い握手

山陰および広島支部は、4月4日、広島・鳥取県境にある道後山麓の三坂峠に集まり、中央分水嶺踏査の合同キックオフ大会を盛大に行った。山陰支部からは高田允克支部長ほか14名が、広島支部からは種村重明支部長ほか15名が参加した。

開会式ののち、早本和佳子さん(山陰・実行委員長)と佐々木弘磨さん(広島・実行副委員長)が分水嶺標識を持って固い握手を交わす。そしてこの標識を皆の拍手のもと、近くのヒノキの幹にとりつけた。さあ、キックオフだ！

これから1年半、山陰支部は人形峠からここまでの、広島支部はここから山口県の仏峠までの道なき道をたどりつつ一本の線に育てていく。

その後、一行は道後山山の家へと移った。昨夜の雪で冬の山小屋に舞い戻った感じだった。講演が始まった。今回の分水嶺踏査の仕掛け人・近藤善則さん

(鈴木 貞信)

(科学委員)による「分水嶺の意義と魅力」である。皆、スライドを眺めつつ熱心に分水嶺への熱き想いを聞き入っていた。昼食後はストーブを囲むようにしての交流会。支部報を担当する私は、次号にこのイベントを取り上げ、タイトルを「南北より集まり東西を語る」にしようと思った。

(国枝 忠幹)

丹水会

山と人のかかわりのデータも

ここ20年あまり神奈川県中央部に位置する丹沢をホームグラウンドとして、春と秋に年2回の山行を重ねてきた丹水会が、中央分水嶺踏査に早々と名乗りをあげたのは、会として丹沢以外の山も経験してみたいとの願望があったからだ。上信地区の山田峠から鳥居峠間の担当となったが、この地域の山行記録はそれほど多くはないし、ガイドブックに載るほどの山も少ない。インターネットで調べてみると、記録はすべて藪こぎが大変とあって、悲鳴が聞こえてくるようである。

実際に歩いてその嘆きが決して大げさではなかったことを実感。藪を警戒して残雪期にとりあえず出かけたが、雪が少なくてかなりのところでササが頭をもたげていたのは大いなる誤算であった。

記録はホームページで閲覧いただくとして、印象的だったのは日本海側と太平洋側の地形の違いである。なだらかな太平洋側に比べて日本海側のなんと荒々しいことか。地形の異なりは人々の暮らしにも大きな影響を与える。太平洋側では万座山が頂上近くから緩やかに裾野を広げ、古くから温泉とスキー場が発達した。分水嶺が四阿山につき当たって菅平に至るまでの日本海側は崩落が激しい。分水嶺はここで90度方向を転換し、浅間山の裾野へと続くが、総じて太平洋側の方が緩やかだ。

分水嶺の一角に立ち、広大な平原に集落ができ、娯楽施設の林立へと変貌する過程で、麓の暮らしも山に入る形態もずいぶん変化しただろうとことを考えるとより興味が増す。踏査記録にそういう一面の記録が加われば、さらに充実したものを残すことができるのではないだろうか。

(泉 久恵)



中央分水嶺踏査



総延長：5000km
踏査率：27.1% (2004.8.31現在)

北九州支部

中国山地低山の厳しさを実感!!

北九州支部の分水嶺踏査区間は、山口県東部の島根県境の仏峠から福岡県の平尾台までである。2月に東京で開催された中央分水嶺踏査シンポジウムで、参加者から山口県の分水嶺踏査は困難との発言も出た。4月にさっそく、支部の最強に近いメンバーで仏峠から野道山・野道峠までの踏査登山を実施した。厳しい藪こぎと体力の消耗により予定の3分の1を残した。予想通りの結果になぜか納得してしまった。中国山地の低山は極めて手強い。

北九州支部の担当する区間は、おそらく全国の踏査区間の中で平均標高の最も低い山域と思われる。海拔マイナス59m(関門海底トンネル)から最高で野道山の924mである。

山口県を東部・中部・西部に3分割し、北九州を1区間として、全体を4区間とし、全支部会員を4チームに編成し、それぞれにリーダーを配した。分水嶺の山域には、マムシ・スズメバチが多く危険なので、6月から9月までは踏査を休止している。最近も山口県東部で熊が出没したとのニュース報道があった。北九州支部の現在の進捗状況は全体の15%強である。10月から気合を入れて踏査する予定である。

本州と九州の両地域の踏査は、北九州支部の特性をよく表している。支部会員の85%が九州に在住し、逆に担当分水嶺の山口県に占める割合は80%である。当初、九州在住の会員は山口県の山についてあまり情報を持ってなかった。しかしながら、25000分の1の地図を読み込んで、丹念に分水嶺の線を地図上に記入し、磁石とGPSを携行しての登山は、多くの情報を収集

し、知識を深めることができた。山登りの原点に戻った山行は興味が湧いて楽しい。

4月の支部総会の際、重廣恒夫氏より藪こぎ用の手袋をプレゼントされ、重宝している。支部では、踏査山行参加者に記念品として配布している。1年間使用できる優れたものとの評。

本州と九州の間の関門海峡は、歴史的に戦の場であった。源氏と平家、武蔵と小次郎、そして幕末の長州と幕府軍等である。この海峡を今回の中央分水嶺踏査登山では、関門海底トンネル(人道)を歩いて渡り、1本の線で結ぶ。意義のある活動である。(板倉 健一)

静岡支部

大弛峠で山梨支部と情報交換会

静岡支部は中央分水嶺が本県上にないため、山梨県三国峠から甲武信ヶ岳、国師ヶ岳、大弛峠の稜線を歩くことになった。

第1回目の参加者は、大石惇支部長、照内豊、八木功、室伏偉男、山内眞行、長谷川廣司、大村武敬、小川正育の8名。6月1、2日にかけ、霧雨の中、三国峠に集まり十文字峠に1泊し、甲武信ヶ岳に登り毛木平へ下った。十文字小屋周辺のアズマジャクナゲの群生は、今を盛りと咲いていた。甲武信山頂には、環境省、山梨百名山等の標柱や巨大なケルンが積み、昨今の百名山ブームを象徴している観がある。信濃川(千曲川)、荒川、笛吹川(富士川)の分水嶺を歩き、山頂から250mほど下ったところに、信濃川源流の大きな標識。マイヅルソウ、ゴゼンタチバナを林縁にながめ、源流から遊歩道のような路を毛木平へ下った。道中は源流への散策者

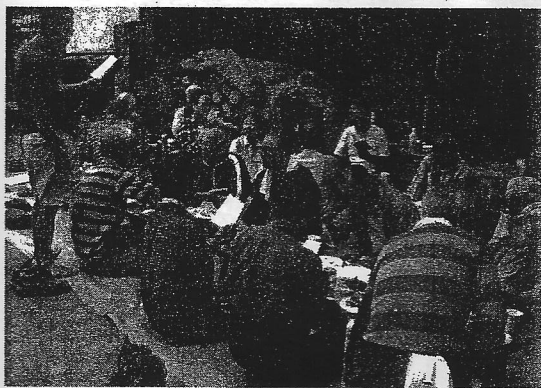
が多いためか、木陰や石の間に菓子のパッケージやペットボトル等のゴミが見受けられ、早い者勝ちでこれらを拾って下山した。

第2回目の参加者は、照内、山内、赤石秀之、葉華子、水野恵子、山本久子の6名と本部分水嶺踏査委員会の宮崎紘一、森武昭の2名。7月24日大弛峠小屋前に参集。16時半頃より古屋学而支部長をはじめとする17名の山梨支部会員と情報交換をかねた懇親会を催す。甲州ワイン、旬の葡萄と桃で飲み歌う。静岡を出発した時は30度を超していたが、ここでは真夏でも20程度度だという。平均年齢は60代半ばを越えていたと思うが、合唱の山の歌は雷雲を蹴散らすばかりであった。

25日6時に8名は国師ヶ岳から甲武信ヶ岳へと出発。山梨支部員は金峰山へと向かった。登山路は整備されており、木道・木段が前国師の近くまで設置されていた。標高2271.6m(東梓)の三角点は盤石のみが地表に露出して標石は皆無であった。照内と女性3名は甲武信小屋泊まり。他の4名は頂より往路を帰る。逆コースの国師への登りには苦勞した。

三国峠～甲武信～大弛峠の踏査は、約30km、一般ルートで問題なく終了。GPSによる高度測定を行ったが地形図表記の高度との差異は小さかった。山梨支部の人たちとも親睦を深めることができ、有意義な山行であった。

(山内 眞行)



大弛峠での山梨支部との情報交換懇親会

秋田支部

高齢化を乗り越えて!!

秋田支部担当の分水嶺は、およそ310kmあり、

そのうち3分の2ほどには踏跡すらない。接する隣県は青森・岩手・宮城の3県、その大方は岩手県との県境にある。

当秋田県に接する分水嶺については、隣県の3支部とで、それぞれ分割しての担当区間は定めず、お互い好きな時期に好きな区間をそれぞれ実施していくことに決めている。従って、踏査済区間をお互い報告することにはしているが、重複区間の生ずることはやむをえない。

また、当支部では募集形式はとらず、支部会員と一部有志で実施している。登山路のある分水嶺以外は、一部会員の高齢化に伴って藪こぎはなるべく避け、残雪期に主力をおくことにしている。

主力メンバーもほとんどが50代半ばから60代後半となり、以前のようにテント泊での縦走は無理であり、ほとんど日帰りである。従って、朝暗いうちから夜遅くまでの行動となる。

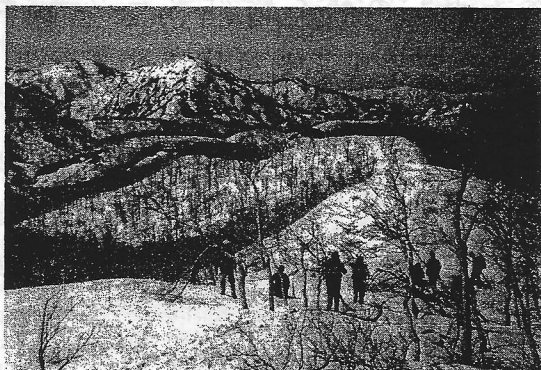
また、実施は天候次第としており、天候が悪ければいつでも中止。これが支部会員以外に募集できない要因のひとつとなっている。

なお、当支部担当区間は、関係支部以外の方々にも自由に踏査していただくことを歓迎している。その際は、当方で知っている限りの情報を提供したい。

現在、踏査終了区間は20%程度、今春は北栗駒山周辺と十和田湖方面を実施したが、交通規制と雪不足が問題であった。特に、国道の冬期閉鎖と林道の除雪が行われていなかったことには困惑した。

高齢化とアプローチの利便性、このことが当支部の分水嶺踏査の最大の問題となっている。

なお、6月29日の秋田魁新報に、「東北の背骨を踏査」と題し、当支部の分水嶺調査が大きく報道された。(佐々木 民秀)



柏峠から望む東山への分水嶺に行く支部会員



中央分水嶺踏査



総延長：5000km
踏査率：30.8% (2004.10.30現在)

東海支部

分水嶺の四季

東海支部の分担する分水嶺は権兵衛峠から野麦峠まで、おおまかにいえば木曾山脈の北部と飛騨山脈の南部を東西に繋ぐ山稜である。東西とはいふものの、太平洋側の天竜川と木曾川の間へ信濃川上流の奈良井川が食い込んでいるため、その稜線は大きく屈曲して南北方向にも走る。稜線上の人とかかわりがある途中の地点はわずかに3か所、旧中山道が通る鳥居峠、以前は中京方面から上高地へのメインルートであった境峠、そして鉢盛山の山頂のみ。人跡稀な山城である。厄介な区間を割り当てられたものだが、通過困難な岩場などはなさそうだから、全区間を切れ目なく踏査することを前提に計画にとりかかった。割り当てられた76kmを15区間に分割し、それぞれにリーダーを委嘱した。

夏、未だ支部の態勢が整わないまま見切り発車、唯一登山道のある木曾駒北方の稜線を歩いた。当支部担当区間の最高標高点である行者岩から俯瞰すると、分水嶺の山並みは果てしなく霞の彼方まで続き、何処も深い森林に覆われて前途多難が予想される一方、やらねばならぬと決意を新たにさせられた。

秋、分水嶺踏査委員会を立ち上げ、顔合せを兼ねて取り付きやすそうな鳥居峠の北側をトレースした。途切れがちな踏跡はあるも、10数年前のガイドブックにハイキングコースとして紹介されていた高遠山付近は完全な藪と化していた。木枯らしが吹いてハラハラと降りかかるは初雪か、とよく見ればカラマツの落葉であった。このあたりは圧倒的にこの樹が多く、山は黄一色である。

冬、アプローチが難しくなる。稜線までの唯一の手

段はスキー場リフトだ。野麦峠スキー場というものの、峠とは遠くはなれた鉢盛山麓にある。スキー、スノーシュー、ワカンとさまざまないでたちで鉢盛山を往復した。

春、藪山の稼ぎ時、残雪期には何度も入山した。梢越しに純白の御岳、乗鞍、木曾駒の眺望を楽しみながら、藪こぎよりはマシだと思いつつ無名峰へ向ってラッセルに汗を流す。境峠から西の4区間、中継点に取り付けた標識。その標識が順次リレーされて最後に野麦峠へたどり着いたとき、ビニールに密封してあったにもかかわらず氷漬けになっていた。(堀 文昭)



秋の高遠山 (1463m)

山形支部

先人の面影偲ぶ分水嶺

山形支部が担当する中央分水嶺は、山形・宮城県境の関山峠から山形・福島県境尾根を経て米沢市板谷峠まであり、実質的な踏査距離は約125km(地形図上の平面距離は103km)になり、さらに各地点から分水嶺までのアプローチ距離85km超を含めると総踏査距離

北海道支部

公募登山報告

十勝岳山頂、三角錐の岩峰を残陽が金色に染めるのを見上げながら、新妻支部長はしめくくった。「今日(8月29日)の大成功は第1に天の利、第2に地の利、第3は人の和のおかげです」と。素晴らしい天候、美しい景観は人の力では、どうすることもできない。しかし人の和は、泥臭く、申して易く、行って困難なことである。それがまた、天候・景観に勝るものであったことを反芻しながら、輪になって、高村光太郎作詞「歩くうた」の大合唱となった。

北から石狩岳、トムラウシと来て、美瑛、十勝岳、そして上ホロカメトック、日勝峠の手前で西へ。この北海道の背骨の中でも今回の分水嶺公募登山は真に中心部を歩くものだった。支部はこの長大な背骨を区分し、各々その責任者を決めて、刻々と実施しており、今回は道東地区が担当であった。応募者が首都圏からの4名と少なかったことは意外であったが、支部からは支部長、長谷川事務局長、田島道東担当責任者をはじめ、14名が参加。前夜祭は十勝岳の懐に位置する白金温泉の白樺荘で行われ、支部会員心づくしの山の珍味が振る舞われた。

当日は早朝4時起床、登山口の望岳台まで車に分乗し、前夜宴席で支部長が提案した、(A)美瑛富士と美瑛の鞍部で分水界に突き当たり、分水界をたどって美瑛岳、十勝岳山頂へ、(B)十勝岳に直登し、ここでAとCを迎える、(C)上ホロカメトック山経由で分水界を忠実に歩き十勝岳山頂へ、という3班集中形式での踏査実施となった。高曇りから時間の経過とともに大快晴となり、風もなく、360度の眺望は抜群の一日。それぞれ時間差はあったものの、支部長の待つ十勝岳山頂に無事集結、とっておきのビールやブランドで乾杯し、下山した。この時期の大雪地区の山は、リンドウ、岩ぶくろ、コケモモ、白たま等々、夏の終わりを告げる花々、そして早くも熟した実がびっしり付いた草木、火山岩の茶、這松の緑と想像以上に豊かな彩りのなか、楽しい山行であった。

北海道支部の分水嶺踏査は、アプローチなどを含めると実質2倍近いアタックが必要で、この2000kmに及ぶ長丁場を支部会員一丸となって実施中の様子が見えたと感じられ、感動した。(宮津 公一)

は210km超になる。分水嶺上に登山道があるのは45km(44%)であり、残りは藪ごぎの連続である。

3月下旬から残雪期の4月中旬まで5回試登を実施し、最終実施計画案を修正して支部総会に諮り、9月末まで分水嶺踏査を15回、踏査距離約72km(58%)を延べ93名が歩いている。10月以降に3回の踏査を実施し、今年中に踏査距離90km(72%)まで延長し、残り35kmは来年3月中旬から4月下旬の残雪期に踏査を予定している。

実際に歩いてみると、20m以上の垂直な岸壁に阻まれ撤退、再度ルート工作せざるを得なかったこともあった。地元で「熊の棲」と言われている番城山では、2mを超える密生したチシマザサに悪戦苦闘の藪ごぎで、200m進むのに2時間を要する始末。さらにそこらじゅうに熊の糞があり、呼子を吹きながらの踏査であった。また、栗子山では、密生した雑木林のおかげで、平坦な山頂の判別に苦労させられた。つい30年前まで人馬の往来していた峠道は、車社会の進展により荒廃、今では峠の名称さえ忘れ去られ、分水嶺上に往時の面影をわずかに残すのみであった。

特に心を動かされたのは水中分水点の横川堰(旧名:助左衛門堰)である。横川堰は宮城県の入ナンバ沢(横川上流)より給水して一枚岩沢に流し、更に一枚岩沢の水を加え、水路とトンネルで山形県上山市の寒沢(萱平川)に流し農業用水として利用されている。賢者の知恵と執念、そして60年という歳月をかけて明治14年に完成した横川堰は、他県から農業用水を引いている全国唯一の堰であり、往時の苦労が偲ばれる。戦後60年、これまで無計画な森林伐採が行われてきたが、稜線沿いのブナの二次林は野性味あふれた自然に戻りつつある。山形支部は地元の山に腰を据え自然環境の現状を直視していきたい。(渡辺 誠)



冷水山分岐から水中分水点に向かうチシマザサの藪ごぎ



中央分水嶺踏査



総延長：5000km
踏査率：37.9% (2004.12.31現在)

緑爽会

踏査中、思わぬ収穫も

旧自然保護委員会のOB、OGで作られた緑爽会は、碓氷峠～矢ヶ崎山～八風山～物見山～内山峠の踏査を申請し承認された。全コースを碓氷峠～矢ヶ崎山～和美峠、和美峠～八風山、八風山～物見山～内山峠の3区に分けて歩いた。

最初のコースは矢ヶ崎山からの下りが岩尾根で回り込む箇所があったほかは、群馬県と長野県の県境尾根歩き。群馬県側がすっぽりと切れ落ちているのに改めて驚かされた。

和美峠から八風山は5月中旬、小雨の降るなかを歩いた。相変わらずの県境尾根歩きだが季節がら、山椒の木の芽を少し収穫できる嬉しさもあった。この区間は尾根がなだらかで広いため、方向を間違えやすい箇所があり、また日暮山分岐の少し手前からは別荘地の際を長く歩くので、あまり楽しいコースではなかった。特に八風山から物見山に向かって南北に伸びる尾根に合流する箇所は、小沢の中を登る歩きにくい道であった。天気が悪かったこともあり、八風山に登って2回目の踏査は、予定より短い区間で終わりとした。

最後の八風山～内山峠の区間は、大半が道の良い部分なので、会員に呼びかけての踏査にした。幸い天気の良い日だったが、八風山分岐から矢川峠に向かう箇所と、物見岩南面の車道から南に下る箇所が急で岩っぽいので、安全を考えて少しはずれた道を歩いた。矢川峠の4等三角点石がわかりにくい場所にあって、少し探した。内山牧場に寄って飲んだ牛乳はうまかった。物見岩から見た荒船山の全容は大きく立派で印象的だった。

(横山 隆)

山げら

悪銭苦闘の9時間

山げらの会は、「鳥居峠～地蔵峠」を担当した。当初、登山道があると思って選んだ区間だったが、「鳥居峠から角間峠の間は藪」との情報が入ったので5月29日、メンバー5名で下見に行った。1時間少々熊笹の藪と格闘したものの、天気予報が雨だったため、鳥居峠に戻った。

10月23日は、9時25分に鳥居峠出発、途中、棒の上に白い板が載っているのを見たが、下見の時に少し先に三角点の標石を見つけていたので、通り過ぎた。後日、地図に当たると、標石はあるべき位置28分56秒より10秒ずれた46秒であったことが判明、あの白い板のところが、観測すべき箇所だったようだ。

藪に入っすぐのあたりには、県境の盛り土が続いていた。群馬・長野両県が県境に盛り土をしたもので、浅間山の辺りまで見られるらしい。12時20分、大塚山着。この調子なら悪戦苦闘4時頃には角間峠に着けそうだと前進を決定。笹藪のなかをまがきながら、小ヤリ着14時30分。狭い頂上であった。四阿



角間峠付近から見た分水嶺、正面が四阿山、右は角間山

山や浅間山の噴煙が見えた。大ヤリには16時20分着。陽のあるうちに角間峠に着けないことが確実となり、角間山の肩からは、登山道を通って下ることにした。17時40分、ようやく藪を抜け肩に出た。空には半月が昇っていた。角間峠18時20分着。メンバー4名に、強力な助っ人3名。ケガもなく、踏査できた。肩から角間峠の藪と、地蔵峠～湯の丸山～角間峠も翌24日、快晴の北アルプスの眺望を楽しみつつ、踏査を終了した。小ヤリからは鹿沢温泉にいたメンバーと携帯が通じたこと、貸し切りバスで送迎が滞らなかったことも幸いだった。(鈴木 裕代)

つくも会

締めくくりは温泉で

つくも会に割り当てられたのは、上越国境の三国峠から稲包山、白砂山を越えて野反湖まで。稲包山から白砂山までの区間は登山道がなく、しかも熊が出没するような噂も耳にした。①与えられたコースを切れ目なくつなぐこと、②できるだけ多くの会員が参加すること、を念頭に検討を進めたが、難易度の高い区間が含まれていたため、会員の技量・力量を考慮し、3つのステップに分けて実施した。

ステップ1の偵察山行は2004年の3月上旬につくも会代表の徳永、分水嶺担当の芦澤ほか会員2名のパーティーで実施。雪庇や強風を伴った吹雪に行く手を拒まれ、三国峠からキノノ平ノ頭手前までの往復に留まった。

ステップ2は同年5月の連休に分水嶺担当の芦澤が実施。残雪期の単独行に加え野反湖から三坂峠と最も困難な区間の踏査となるため、無線機、GPS、発炎筒、熊避けスプレーなども携行し万全を期した。脆くなった雪庇、背丈を覆うほどの藪こぎに悩まされたが、幸い天候には恵まれ予定通り2泊3日(テント泊)で無事に踏査を終えることができた。

ステップ3は同年9月下旬の連休に実施した。残された三国峠から三坂峠の踏査には一般公募の仲間1名を含む総勢16名が参加。三国トンネルの新潟側坑口脇の登山口から取り付き、一路三坂峠を目指した。長倉山から先、見通しの良い国境の稜線上を歩くこと約5時間、三坂峠に到着し三国峠から野反湖までの踏査が完結した。下山後、宿泊先の猿ヶ京温泉で踏査完結を祝い盛り上がった。(柴山 信夫)

科学委員会

田代・帝釈、踏査顛末?!

科学委員会の担当区間は南会津の馬坂峠より安が森峠。「馬坂峠より田代山峠」を1区、「田代山峠より安が森峠」を2区に分けて踏査することとし、1区は公募参加者と10月に、2区は11月の偵察山行のうえ来年の残雪期に本踏査の予定である。今回は1区について報告する。

10月16日、委員10名、公募参加者9名が南会津の松枝峠へ向かう。昼食後「武田久吉メモリアルホール」を見学した。武田氏は日本山岳会6代目の会長であり、理学博士として植物学の教育啓蒙に尽力され、さらに今日の尾瀬を守った偉大な先輩である。また当会のシンボルマークは同氏のデザインである。

2日目、8時20分に馬坂峠より、登山路班と分水嶺を忠実に辿る藪こぎ班に分かれ踏査開始。根笹地帯を過ぎるとオサバグサの群生地があった。三角点の帝釈山(2061m)で360度の展望。間近に会津駒ヶ岳、尾瀬の燧岳、さらに遠くの山々。登山路は分水嶺の細尾根を下り、その後は大きく離れることなく併行する。しかし藪こぎ班は予想以上に時間を要す。11時過ぎ田代山の弘法太子堂に着く。田代湿原は北側に緩く傾斜しており、分水嶺は南縁を通るが、木道工事のため滞水帯への踏み込み不能で望見するに止める。予定タイムをオーバーしたため、田代山峠までの計画を断念し猿倉登山口へ下山。同日、別動隊の近藤委員が田代山峠より田代山までの分水嶺を藪こぎで踏査した。

(1)分水嶺は忠実に県境であり、古地図の藩境と一致する。明快に水利権を巡る線引きである。

(2)分水嶺の南側は断崖が多いため、登山路はすべて傾斜の緩い北側(日本海側)を通る。

(3)分水嶺を境にした植生の相違は見られず、どちらも日本海型樹林である。(向野 暢彦)



田代湿原を通る分水嶺



中央分水嶺踏査



総延長：5000km
踏査率：41.6% (2005.2.28現在)
延べ339日、1839人参加

東九州支部

自衛隊演習場内を踏査!!

「阿蘇くじゅう国立公園」とその周辺には、阿蘇外輪山や久住、飯田高原などのたおやかな草波が広がり、「九州中部大草原地帯」とも呼ばれている。多くの観光客、登山者を魅了しているが、その中であってほとんど人に知られていない広大な草原がある。「豊後富士」の異称を持つ湯布岳の西に広がる日出生台草原である。

湯布院、別府などの近くにありながら、なぜ知られていないのか。古くから陸軍、陸上自衛隊の演習場として使用されたため隔絶され、最近では沖縄米軍の射撃訓練場にも利用されているからだ。

そのど真ん中を中央分水嶺が通っている。東九州支部が担当する96kmのうち約14kmとかなり長い。だが、演習場、つまり高原一帯は鉄の柵に囲まれ、常に歩哨が立つ厳しさ。砲弾が飛び交う演習時間だけでなく、通常も立入禁止。それでも歩かせてもらわねばならない。

支部では昨年夏、管理機関の湯布院駐屯地と何度か



前方は旧陸軍建造物 (高台の上)

交渉した。窓口は広報室長 (二等陸尉) で、意外にも大きな興味を示し、計画書、地形図、参加者名簿を添えて「基地見学申込書」を出せと言う。問題は踏査時期だった。演習は西日本各地の自衛隊が順番待ちの状態、土、日曜日の連続2日の日程を入れるのはかなり困難という。隊と当方との調整を重ねた結果、許されたのは春秋の一時期に設けられている演習場環境整備期間のうち、11月27、28日の2日間だった。しかも大分県当局と防衛庁の間に交わされた使用規制の「自然環境保全地域」への立ち入りもOK。

初日は陸尉、2日目には広報隊員が案内してくれた。複雑に波打つ草原の分水嶺は、2.5万地形図でも正確には読みとれない。晴天に加え、地形を熟知している隊員のガイドはおおいに助かった。

旧陸軍時代の射撃指示台の跡、弾着を確認する半地下式の壕なども通り、実弾射撃の着弾地では無数の砲弾の破片の間を歩いた。初日に演習場境界線から草原部分の大半を踏査、2日目は演習場を見下ろす福万山頂に向けて、森林帯を地図を頼りに登った。

湯布院駐屯地は、連絡、調整から案内、さらに支部員の駐車場の確保ほか、2日間の踏査開始地点から終了地点間にジープまで用意してくれた。ご協力に深く感謝したい。
(飯田 勝之)

越後支部

三国峠の打ち上げ式目指して!

越後支部の担当は、尾瀬への入口になる鳩待峠から至仏山 (ここから県境に沿う)、大水上山、巻機山、清水峠、谷川岳、平標山、三国峠までの約87kmである。標高は2000m前後だが、谷川連峰の主稜を除けば登山対象からはずれており、登山道は整備されていない。



大水上山から平ヶ岳方向の展望

かつては刈り払いを実施したところも、今は背丈を越すチシマ笹に覆われ、進路標定に苦労する状況となっている。当支部では、分担区間を大きく3区に分け、区によってはさらに分割し、それぞれに正副班長を割り当て踏査を実施した。

至仏山から丹後山間は、区間中最も難易度が高い。残雪期を選び、4月下旬に単独行(小林重一会員:エヴェレスト登頂者)で踏査したが、春の好天は続かず、困難を極めた。途中2日間の停滞を余儀なくされて、踏査に6日間を要した。無雪期ではなおのこと、灌木と笹藪で進路標定が難しく、踏査は一層困難を極めるであろうとの報告である。

大水上山から巻機山間も登山道がないため、4月29日から5月2日の残雪期に実施した。巻機山から清水峠間は2班に分割したが、チシマ笹と悪天候に悩まされ、2度の挑戦も空しく一部は平成17年の残雪期に持ち越した。未踏査部分は4月中旬に再調査の予定である。

清水峠から谷川岳(トマノ耳)区間の主稜線は、登山道は整備されているが、縦走者は少ない。途中マチガ沢やノ倉沢の源頭尾根は痩せており、笹で覆われているので、通過には細心の注意が必要である。新潟県と群馬県への往来峠でもあった蓬峠周辺は、チシマ笹の繁茂が進んで高山植物への影響が出ている。戦国の武将も往来したという清水峠越え道は、今は送電線の関係者が歩く程度だが、場所によっては往時を偲ぶせる雰囲気を残している。谷川岳から平標山間は、1日行程の縦走路であるが、やはり歩く人は少ない。

平標山から三国峠は、本踏査事業の最後に三国峠で打ち上げ式を実施する計画で、残してある。一部、平成17年度に持ち越したため、本年6月に支部会員大勢に呼びかけ実施する予定。あとは好天を祈るだけだ。

(横山 征平)

福井支部

老将に思いを馳せる分水嶺

福井支部は、岐阜県白鳥町松峠から岐阜・滋賀・福井の3県に跨る三国岳を経て、滋賀県境の大御影山までの162.9kmを担当している。このうち、平家岳から温見峠までの26.6kmは、石川支部が担当し実施してくれている。

支部では、松峠から平家岳を井上彪会員、温見峠から栃の木峠を宮前庄三会員、栃の木峠から大御影山を井上泰利会員の担当とし、全会員が何らかの立場で参加するよう総会で呼びかけ、踏査を実施している。昨年福井豪雨で林道が土砂崩れで通行不能となるハンディを乗り越えて、越美の国境は松峠から油坂峠まで踏査が完了した。栃の木峠から大御影山についても85%が踏査済みである。

ここでは柳ヶ瀬山についてご報告したい。10月31日、国道365号線で栃の木峠から滋賀県に入り、椿坂峠からこの山に向かった。私を含めて福井支部のメンバー15人が参加した。

峠から、別荘地へと向かう私道に入ったが、別荘地のなかは道が輻輳していた。住人の許しを得て敷地内から登り、三角点を見つけた。ここからは藪こぎ。広い尾根に出たが、分水嶺がわかりにくい。しかも、林間でGPSが効かない。登りだして3時間40分、ようやく送電線の巡視路に出て、鉄塔がある広場に着いた。久しぶりに大勢の仲間と楽しいひと時を過ごした。

さらに40分で玄藩尾城跡に着いた。広くよく整備されている。ここは柳ヶ瀬山の頂で、戦国時代の柴田勝家の本陣が置かれたところでもある。桜並木の歩道の先に、標高439mの三角点が確認できた。刀根越えをし、玄藩尾城登山口から敦賀の人たちの車で、椿坂峠まで送ってもらった。

(宮本 数男)



柳ヶ瀬山での記念撮影



中央分水嶺踏査



総延長：5000km
踏査率：54.4% (2005.4.30現在)
延べ489日、2499人参加

福岡支部

山城と修行者を追って

福岡支部の担当は国内有数のカルスト台地の「平尾台」から、日本三大霊山「英彦山」までと決まる。総踏査距離約37km (地図上の平面距離) を7区間に分割し、04年11月から05年5月までに完了することとした。北九州の背骨を通る福智山系とと思っていたが、地形図を眺めてその右手の稜線だということに気付かされた。標高400~500mの尾根歩きはかなりのブッシュが予想され、藪が落ち着く11月30日からのスタートとなった。平尾台のルートは一部三菱鉱山で現在でも石灰岩を採掘しており、立ち入りが不明確のため、最後に廻すことにした。なお、この稜線は筑豊盆地の田川郡と海岸線に広がる京都郡の狭間にあり、昔からかなりの往来があったことが伺える。

鎌、鉋、鋸を準備し、いざ味見峠をスタートすると、障子ヶ岳まではよく整備されたハイキングコースであった。見事な土塁が残り、室町後期の足利一族の山城の跡が頂上に残る。そこから向かういくつかの山頂にも山城が築かれていたが、ほとんどが豊臣秀吉の九州平定により落城させられている。これらのピークを結ぶ尾根筋は、その大部分が手入れをされていない人造林で、下草が藪となり、かなりのアルパイトを強いられた。2万5千分の1の地形図を久しぶりにじっくりと眺め、コンパスとGPSを駆使しながら歩くのは楽しいものである。地形図の情報の多さには敬服するが、現在使用されていない道や構造物が削除されてなかったり、10数年前に造られた2車線の道路が記載されていないなど、まだまだ不備があることに気付く。3回目の踏査の頃より鹿の糞が出始めた。鹿が杉、檜の皮を食べているのである。途中、3~4kmにも及ぶ鹿

よけネットにも遭遇した。

今年は九州も雪が多く、来月に向かう英彦山を仰ぐと、その1200mの峰は雪に覆われ山頂は雲の中である。我々が歩いているこの分水嶺の稜線は霊峰への修行者のルートでもある。次の踏査は10数人のパーティーとなり、温泉宿に1泊し懇親会を兼ねた楽しい踏査となる予定である。

(浦 一美)



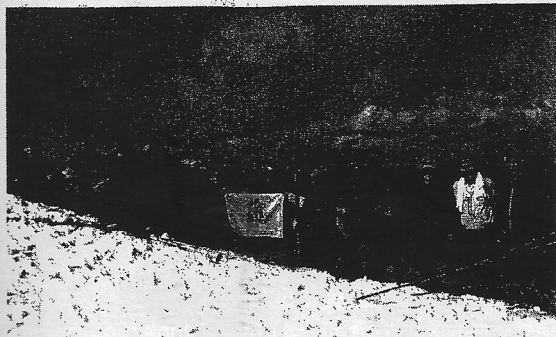
飯岳山の展望とそれから続く戸城山への分水嶺

関西支部

支線へつなぐ分水嶺

関西支部は、日本山岳会が誕生した30年後に発足しており、日本山岳会の100周年は関西支部の70周年にあたる。中央分水嶺踏査は、2004年3月にその企画詳細が決定されたが、これに先立ち支部では2002年12月発行の関西支部報で「支部70周年事業」として同踏査を位置付け、支部会員に参加を呼び掛けた。

当初は、大阪・京都・兵庫の3県境に近い三国岳から、兵庫・鳥取県境のほぼ中央に位置する志戸坂峠までの198kmを34区間に分け、日帰り、もしくは前夜泊で踏査することとした。しかし、志戸坂峠以西の人形峠までの76kmが担当支部のない空白区間になること



関西支部と山陰支部との合同踏査 (赤岩の頭で：05年4月3日) が判明したので、さらにこの区間を16区分して追加実施することにした。

05年2月時点で、全50区間のうち31区間がすでに踏査されている。支部報へは、藪山歩きの新たな楽しさや、ルート選定の困難さ等が逐一報告されているが、全区間踏査の暁には、あらためて踏査リストを支部報に掲載することとしている。

中央分水嶺に刺激されて、支部内には支線の分水嶺踏査の話が持ち上がった。すなわち、大阪湾と伊勢湾への分水嶺、瀬戸内海と太平洋の分水嶺等である。その一環として、大峰山奥駈道を中心とした古来の修験山嶺の全区間を辿る計画を、70周年事業に位置付けて実施したところ、そのメインルートはほぼ全区間の踏査を終了しようとしている。さらに、今年は四国の分水嶺踏査をやろうと盛り上がっているところだ。

分水嶺のおかげで、支部山行の機会が増すとともに、新しい仲間が増えているので、これを機会に、支部活性化に努めていきたいと思っている。

西に行けば行くほどブッシュがきつく、またアプローチにも時間を要するので、2、3泊するつもりで一挙に2、3区間をまとめて踏査することも必要となるであろう。ブッシュが寝ているこの残雪期を逃すと、次の秋・冬までかかることになるが、全区間踏査に向けて引き続き積極的に取り組みたい。(金井 良碩)

山梨支部

ギャラリーは、ゴルファー?!

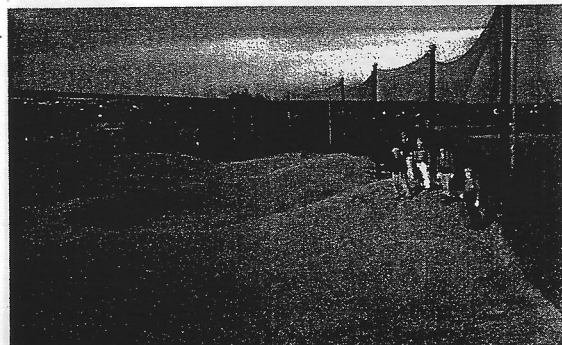
埼玉・長野・群馬県境の三国峠から甲武信岳、金峰山を経て、奥秩父西端、山梨・長野県境の野辺山まで。これが、山梨・静岡両支部に示された、分水嶺踏査計画である。このうち、大弛峠～野辺山間を山梨支部が担当することで静岡支部との合意をみた。昨年7月24

日には大弛小屋で、静岡支部との情報交換会を盛大に行った。

当支部も会員の高齢化が進んでおり、在籍者は多いが実働部隊が少ない。可能なかぎり多くの会員が参加できるように、担当する行程を、A区間(大弛峠～金峰山～八丁平)、B区間(八丁平～小川山～萱ダワ)、C区間(萱ダワ～信州峠)、D区間(信州峠～横尾山～野辺山)の4区間に分割した。

核心部はB区間で、距離が長く標高差もあり、しかも信州峠～小川山間は踏跡も不明瞭であることから、萱ダワまでは調査を2回、さらに信州峠～松ネッコ間についてはルート工作を4回行った。D区間は、標高差はないものの距離が長く、夏季は草丈が長く歩行困難が想定された。しかし、同事業の最終区間でもあるため多数の会員参加を期待して、中間の三沢の大タルで2分割し(信州峠方面をD1、野辺山方面をD2)、2隊に分かれて、同時調査を行うこととした。野辺山周辺は、分水嶺がゴルフコース内にあるため、事前に趣旨を説明し、了解を得たうえで実施した。隣接するホテルからは建物内の通過も許されたが、さすがにこれは遠慮した。長野県の川上村役場や筑波大学演習林の通行許可を得て、アプローチに林道を利用し車で入山できたことは、踏査時間の短縮に役立った。

04年4月6日、C区間で支部踏査の幕を開けた。7月のA区間踏査は、登山道が整備されていることもあり、多数の参加を得て実施。10月2日には、熊本支部との衛星交信にも参加した。そして12月18日、D1踏査は雪もなく、萱が倒れ登山道が不明瞭な箇所があったが、無事終了。D2踏査は、清里アーリーバードゴルフ場のコースを、プレーヤーの了解を得て踏査し、野辺山鉄道最高点に到達。山梨支部の分水嶺踏査は、調査も含め14日間、延べ77名の会員の参加を得て、完了した。(坂本 桂)



ゴルフ場が分水嶺 (会員が立っている場所)



中央分水嶺踏査

踏査率：67.1% (2005.6.30現在)
延べ587日、2981人参加

アルパインスケッチクラブ

スケッチブックに分水嶺

04年6月19日、軽井沢駅に集合、徒歩で旧軽井沢市街・旧軽井沢峠経由し霧積温泉の金湯館に泊まる。

翌日霧積温泉を出発し、十六曲がりの登りでスケッチをする。最後の急坂を越えると鼻曲峠。ここが中央分水嶺上である。さっそくGPSを取り出し、緯度・経度と高度を記録する。三角点のある鼻曲山頂上は見晴らしが悪いので5分ほど離れた小天狗岳に移動する。360度の展望の中で、思い思いのスケッチを楽しむ。

昼食後、4人の碓氷峠組が落葉の積もった小道を快適に降りるが、疲れた体に留夫山の登りはつらい。地図上の三角点を見つけては記録する。峠の茶屋で茶を飲み、見晴台でスケッチブックを開き妙義山のスケッチをする。見晴台からの道はかすかな踏み跡程度で、最後はなくなってしまったが、分水嶺沿いに下って国道18号の碓氷峠に立つ。国道を歩き軽井沢駅に到着。

もう一方の火山ルート上までの4人は昼食後、鼻曲山を下り30分くらいで鼻曲山の西登山口の国境平に到着。その後は平坦道を歩く。国道146号線の県境バス停から林に入るが、林の中はシダ類の生い茂った道無

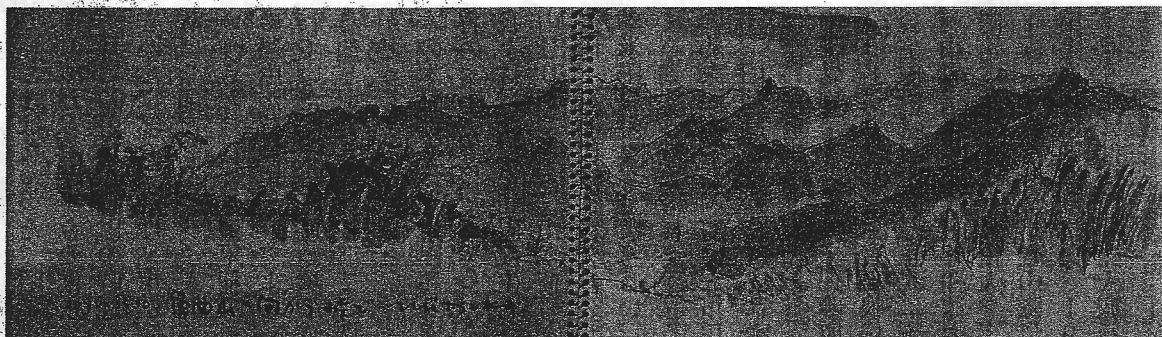
き道で、藪こぎをしながら進むと火山ルート上のつづじが原バス停に突然出た。バスで軽井沢駅に行き、碓氷峠ルート隊と合流した。(沼田・富樫記)

アルパインスキークラブ

藪漕ぎが残った

アルパインスキークラブは帝釈山脈の一部、馬坂峠と三平峠間を分担した。水平距離にして約22kmだが、桧高山系から黒岩山までの7kmほどを除いては登山道がなく、スキーか藪漕ぎが要求される。われわれは4度挑戦(各回とも10名前後参加)し、70%強を踏査した。残り6km程は黒岩山～孫兵衛分岐と、台倉高山～引馬山の2か所に分れた。あと2回の挑戦でなんとか片付けたい。以下はこれまでの概要である。

初回は04年4月24～25日、スキーで三平峠～桧高山北峰間にトラックを刻んだ。2回目は同年9月12日、桧高山北峰～黒岩山を踏査した。これで三平峠からのトラックが繋がった。袴腰山と黒岩山は踏査のため1時間ほど藪漕ぎを強いられた。3回目は1か月後の10月10日、馬坂峠～台倉高山。藪漕ぎ覚悟の山行だったが、切開きがあつて拍子抜け。台倉高山から南へ30分



鼻曲山へ向かう峠でのスケッチ



錆付いた指導標：引馬峠の檜枝岐側付近でみつけたもの

ほど藪漕ぎに挑戦するも長続きせず。4回目は05年4月30日。スキーで舟岐川、黒沢を詰め、引馬峠から2手に分れて台倉高山と黒岩山の二兎を追ったが、台倉高山組は1981mピーク(引馬山)の先のコル1928m地点で、黒岩山組は孫兵衛分岐手前の2012m地点で時間切れとなった。舟岐川のテント場から引馬峠までが長すぎたためであるが、引馬峠では檜枝岐側下山口に錆びきった道標を発見、先人の往来の匂いをかいだ。

(日出平洋太郎)

00会

藪の殿堂を踏査

昨春、分水嶺踏査委員会より大川会員が持ち帰った栃木・福島県境の山王峠～安ヶ森峠間について、00会で資料を集めて検討する。藪がひどく難度が高いが、三渡会長の判断で担当することを決定した。この区間は藪と灌木で9割は道がなく、水もない。残雪期以外の縦走記録もない。支援隊は車の移動、荒海山への通常ルートからの水の補給等の調査山行を事前に行った。

実踏査は当初10月に予定したが、台風で流れた。11月21～23日、晴れが見込めたため決行。踏査隊は佐藤充信会員と友人の田村利弘氏、支援隊は大川昭、石井孝行、佐野正之、副島一義の各会員。20日に山王峠駐車場まで幕営。21日6時30分発。峠でGPS、無線機を調整する。佐野会員に見送られて山道に入る。雨量計測小屋までは順調。その後藪が深くなり、2回ルートをはずした。GPSに注意する。送電線監視道に出て一安心、15時20分に鉄塔下で幕営する。

22日6時30分発。藪が深く、灌木がミックスした状態が連続する。1276mピークに12時10分着。荒海山への登りは勾配がきつくなり、灌木帯の中ザックがひっ

かかり進めない。三角点頂上に16時20分着、山頂直下の避難小屋へ16時30分着。水4ℓが届いていた。

23日6時30分発。隣の次郎岳は指呼の間だが、道はまったくない上に南面は切れており、稜線と北側の灌木をくぐり抜けて進む。次郎岳9時20分着、1475mピーク11時34分着、1363mピーク14時15分着と藪は背よりも高い。安ヶ森山近くで藪が背位に低くなり楽になる。無線が通じ、支援隊が安ヶ森山へ向かっていることがわかり、水を依頼した。15時18分安ヶ森山で皆と一緒に。山座同定、記念撮影、踏査達成の喜びを分かち合った。

00会会員の協力に感謝。中央分水嶺踏査の1区間の責任を果たせたことを嬉しく思った。(佐藤充信)

01会

夏・春の上信国境を行く

01会の中央分水嶺踏査は、首都圏2の野反峠～山田峠の担当となった。行程が長いので2班編成とし、それぞれ両端の野反峠と山田峠からスタート、赤石山で合流して下山する計画を立てた。

04年8月27日午後、A班4名は野反峠をスタート、野反湖を見下ろすすなだらかな分水嶺を歩く。クマザサの中の小道をたどり、大高山を越え荒廃した五三郎小屋に泊まる。翌28日朝、雨中出発、湯ノ沢ノ頭からは踏み跡程度になり笹こぎを強いられた。赤石山の先で分水嶺を離れ大沼池に下山した。

一方、B班11名は事前の調査で山田峠～渋峠間の分水嶺が立ち入り禁止となっていることが判明していたので、8月28日朝、渋峠から小雨の中をスタートした。横手山まで、ここも分水嶺は立ち入り禁止で上州側の林道を行った。横手山から鉢山を経て赤石山までは一部を除きほぼ分水嶺沿いに登山道をたどり、大沼池へ下山してA班と合流した。

無雪期立ち入り禁止の横手山～山田峠を積雪期に踏査すべく翌年3月、再度踏査を目指したが悪天候で果たせず、かろうじて雪の残る4月17日、快晴に恵まれ2名で横手山をスキーで出発。渋峠を経て山田峠への最後の下りは雪が切れて車道歩きとなったが、分水嶺をほぼ完全にトレースすることができた。

ぎりぎりの残雪期にやっと踏査を果たすなど難行したが、季節を変えての山行を楽しむことができた。

(岡田尚武)



中央分水嶺踏査



踏査率：72.9% (2005.8.31現在)
延べ638日、3141人参加

宮城支部

たが 箍の締まった分水嶺

宮城支部では、共通区間に割り当てられていた山形支部との協議の結果、関山峠から北を担当することになった。区間内の全体を確認した結果、登山道は全体の約30%程度であることが判明。多くの会員参加を理想とするものの、藪こぎに慣れていない会員が大多数という現実がある。このため、道のない区間は、残雪期に踏査することとなり、平成16年の春から行動に移すことになった。

16年の支部総会に先がけて最初の区間、鬼首峠から花立峠間が実行に移され、多くの支部会員に迎えられ感激した。夏場は道のある区間を踏査し、多くの会員がこれを消化した。特に苦勞したのは、今年3月に実施した花山峠～須金岳の区間だった。行動中荒天に変わり、硬くなった雪の痩せ尾根とエスケープルート of 柔らかくて深いラッセルで、里に下りたのが23時を回り、出迎えのサポートを心配させてしまった。

若手・年配者・女性などの協力により、5月14日に宮城支部担当区間のすべて115.3kmを踏査完了した。実際に歩いてみると、県境と分水嶺が離れていたり、地形が複雑で分水嶺の尾根が不明な所があった。また、



船形山の頂上から中央遠くに見える荒神山への分水嶺を歩く

熊の足跡とほぼ同じルートで行動したり、思わぬ樹木に出会ったり、時期によっては、山菜サラダを食べながら行動したり、遠いと思っていた隣の町をすぐ近くに見おろすことができ、驚かされたこともあった。

送りサポート・迎えサポートについて実費を支部会計で負担してもらったのも初めてのことだった。何よりも大きかったのは、17日間の山行で、延べ93人の参加を得たことで、支部の箍が締め、行動意欲が高まったことではないかと考えている。本部の企画ではあったが、支部としてこれを確認し行動目標のひとつとして、若手から年配者まで、思いもかけないチーム編成で行動できた。ほんとうに楽しい山行の機会を与えられたことに感謝している。
(高橋二義)

富山支部

神通川と木曾川の分水嶺を歩く

富山支部は中央分水嶺から離れているため、岐阜支部と協力して岐阜県内の宮峠～乗鞍岳～野麦峠の区間を分担することになった。全長約50km。富山と名古屋を結ぶ国道41号線を高山から南に走ると宮峠776.6m。ここを西の起点として乗鞍岳3025.6mに至る稜線の日本海側の水系は、宮川から神通川に合流して富山湾へと注ぐ。登山道があるのは日影峠から乗鞍岳山頂の間だけで、道のない区間は残雪期に踏査計画をたてた。

04年3月、宮峠～日影山間から踏査をスタート。国道361号線(美女峠)をはじめ、稜線を横断する林道などサポート要員が利用できる道路が何本もあって助かる。前日に宮峠近くの民宿に入り、早朝から美女峠を起点にカンジキや長靴スタイルでの踏査。杉林の中ではGPSがうまく使えず苦勞する。4月上旬には、



分水嶺上最高峰の乗鞍岳頂上で(右端が木戸支部長)

飛騨高山スキー場から西方向に踏査。牛首山を過ぎ標高が下がるにつれ藪との闘いとなるが、10時間弱の行動で前回終了点に到達し、冬季区間を無事終えた。

夏季区間は9月に計画、乗鞍岳肩の小屋に10名で入山したが、翌日は強風と雨混じりのガスで剣ヶ峰の1等三角点を確認したのみで敗退。1週間後に4人で再挑戦、石の地藏さんを拝みながらハイマツの千石尾根登山道を下っていく。地図にない奥千町避難小屋は真新しいログハウス。ここから千町ヶ原にかけ池塘のある湿原地帯。この日も10時間行動だったが、丸黒山とゴールの日影峠には差し入れをもったサポート会員が待機していた。

最後に残ったのは乗鞍岳～野麦峠の区間。05年3月23日早朝、長野県奈川村(現松本市)観光課のアドバイスのおかげで、除雪された道路を野麦峠1672mまで一気に入る。1等水準点を確認し笹藪の中へ。登るにつれ雪がまだ深く、三角点は発見不能。2163mでのテント泊、翌日は高天原経由でゴールの乗鞍岳剣ヶ峰をめざす。氷に包まれた乗鞍本宮の前で踏査完了の握手、中央分水嶺の最高地点である。

03年11月の調査開始から1年6ヶ月、偵察・事前調査も含め12回(延べ20日間)、延べ51名の支部会員の参加により全行程を完全踏査することができた。全コースを歩き通した木戸支部長の提案で5月中旬、亀谷温泉にて反省会を開催した。(山田信明)

宮崎支部

今、分水嶺は最南端の佐多岬へ

日本最北端の宗谷岬を発した日本列島中央分水嶺は、山野・岩峰・田園を駆け巡り、ここ佐多岬に達する。2004年12月11日午後2時25分、今まさに我々宮崎支

部員6名は、分水嶺最南端の岬へとその足跡を刻もうとしていた。

宮崎支部部分分水嶺踏査班は、12月10日、4月の例会登山で計画した分水嶺踏査区間(荒西山～六郎館岳)を事前踏査し、翌11日、佐多町の田尻集落に近い佐多ビーチホテルで太平洋の朝日を拝し、内山会員と合流後佐多岬へと向かった。田尻集落のはずれから小ピークを目指し、獣道もない分水嶺をタラノキやサルトリイバラに行く手を阻まれながら、三角点や独立標高点を辿り、太平洋戦争時の砲台跡らしきピークを最後に、展望台に到着したのは3時間後であった。ここで南日本新聞の山口支局長と合流し、もうこれ以上は進めない岬突端までの最終区間をそれぞれの思いで歩き、踏査を完了した。

岬では、02年9月から土日の休みを利用して、錦江湾分水嶺単独完全踏査に挑戦し、47日目の今日、その目的を達成した内山会員の快挙に祝杯を挙げるとともに(ちなみに氏の51歳の誕生日でもあった)、日本列島中央分水嶺の佐多岬到達という二重の喜びを味わった。このあと、海岸沿いの岩場を伝うことで岬突端の崖下まで到達し、太平洋の荒波の洗礼を受け余韻を楽しんだ。

佐多岬の観光客は、展望台で太平洋を眺めて帰るのが一般的であり、今回のように太平洋の飛沫を浴びるほどの経験はしたことがなかった。岬までは有料道路のみで歩道は設置されていないため、帰路は「シェルパ斉藤氏(『BE-PAL』誌にて活躍中のバックパッカー)お勧めの「本土最南端トレイル」を経由して田尻集落に帰着した。

宮崎支部の踏査完了には、鹿児島県内の分水嶺を一手に引き受けて踏査した内山会員の努力に負うものが大であった。紙面を借りて感謝の意を表する次第である。(児島実照)



中央分水嶺最南端の佐多岬で



中央分水嶺踏査



踏査率：79.3% (2005.10.1現在)
(山行報告未提出分を含めた実質的踏査率は90.5%です)
延べ743日、3708人参加

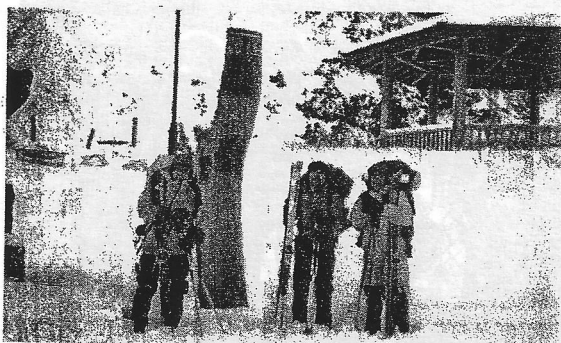
青森支部

津軽半島を行く

当初、竜飛崎から発荷峠までの70kmが青森支部の担当だったが、岩手支部の要請でさらに四角岳まで延長することとなった。担当区域を3分割し、弘前地区会員は竜飛崎から津軽半島中央部、青森地区会員はそこから南八甲田横岳付近、残りは八戸地区として計画をたてた。

2005年2月26日午前8時、会員3名が1週間の予定で竜飛崎をスタート、階段国道を経て国道339号と併走する分水嶺をスキーで南下、シールの不具合と灌木の密生で距離が延びずピーク488m付近でビバーク。翌27日は風雪が激しくシールがこのままでは無理と判断、矢形石山を越えてから陸奥湾側に下山を決定。山中に1泊し、28日12時30分、海辺の算用師部落に到着。

2回目は3月21日、会員2名で踏査開始。雪面が固くなったのでスキーがよく滑り、前回の終了点には10時30分到着。半島第2の高さの増川岳を左に見て、アップダウンを繰り返して、四ツ滝山に15時着。30分ほど進んだブナ林の中をビバーク地とした。翌22日、品岳分岐付近から、ブナ林から杉、ヒバを加えた林へと変



本州最北端の竜飛崎で

819 420/人

わり、標高も低くなったため、針葉樹の若木が密生、距離が延びず7km程進んだだけだった。随所に津軽半島縦貫道建設の測量標識がブナの立木に打ち付けてあった。23日は玉清水山までの予定であったが、筆者の親戚に不幸があり、途中で下山することになった。

3回目、前回の終了点の県道12号には、4月2日7時着。袴腰岳には14時着。日本海からの強風のため山頂には雪が無く、今回の踏査で三角点が確認できたのはここだけである。この日は赤倉岳分岐付近でのビバーク。翌4月3日、夜半からのミズレとガスのため11時出発。急登に手こずったが大倉岳12時着。十二岳を経て16時にはビバーク。

4月4日は朝から晴天に恵まれ、7時40分発。最終地点の県道と分水嶺が交差している所までは人工林地帯で半日の行程である。苦労はあったが、クマタカの飛翔、クマガラのドラミング、採餌木の確認など山行を楽しむことができ、最終地点には13時着。今回本州北端からの中央分水嶺踏査の一区間をトレース出来たことを嬉しく思った。
(清野 宏)

石川支部

風雪の中15時間

石川県には中央分水嶺が通っていない。このため、福井支部を応援して、両白山地の井岸山から温見峠までの26.6kmを分担することとなった。両白山地は福井県と岐阜県の県境を走っている山域だが、その大部分には道がなく、アプローチも不便で長く、取付の困難な地域である。しかも稜線上には灌木と笹が密生していて藪漕ぎを強いられる所でもある。

2004年4月18日から本格的に踏査を開始した。この区域にはW088~W097まで10箇所のポイントが設けられている。このポイントを一つずつ押さえていくこ



屏風山からの分水嶺を下る

とにする。無雪期、13回にわたって10箇所のポイントすべてを踏査した。後は、これら点から線に繋ぐべく積雪期を待つこととなった。

降雪が治まった2005年3月19日、旧根尾村上大須ダムから入山。左門岳を経て左門岳の肩に幕営した。翌日2隊に別れ、屏風山～井岸山まで踏査した。A隊：大庭、織田会員は幕営地6時10分出発。湿雪に足をとられながらアップダウンを繰り返し、井岸山往復。15時帰営した。B隊：西嶋、前川、岡本会員は6時5分出発。11時55分屏風山着。更に進むが、複雑な尾根に迷いながら、急斜面を2ピッチ懸垂下降で下りたところで引き返す。朝方からすっきりしない天候であったが、17時過ぎから徐々に風が強くなり雪が舞いだした。風雪は更に強くなり雷も鳴りだす。ヘッドランプの明かりを吹雪がかき消す中、21時、帰営する。

残る屏風山西側を踏査すべく4月22日、笹生川ダムから入山した。中高山を経て中高山の肩から左右に分かれて踏査を実施。A隊：大庭、前田、前川、岡本会員は藤倉谷の頭に幕営。翌日、屏風山を往復(1ピバーク)する。B隊：西嶋、織田会員は蠅帽子峠で幕営。翌日、刈安山往復の後、蠅帽子川を下る。C隊：澤村、埴崎、中川会員と大庭(妻)は中高山の肩までサポート。今回の踏査には積雪がほとんど残っておらず、藪漕ぎを強いられたが、会員の連帯感と使命感、そして何よりも分水嶺踏査を完遂しようという強い意志によって踏査を完了することができた。(岡本明男)

京都支部

「ロマン」と「ゲーム」としての分水嶺

京都支部は京都府と滋賀県の分水嶺を担当し、福井県境の大御影山(950m)より、兵庫県境の三国岳(508m)までを踏査することとなった。

2004年4月に三国岳をスタート、月1回支部例会のかたちで15回実施し、2005年7月、無事終了することができた。参加者は会員35名、非会員11名、延べ231名であった。期間中雨で中止となったのは1回のみ、後は天候にも恵まれ順調に線を伸ばすことができた。第2回(2004年6月)からは大御影山より南下し、小野村割岳を中間点とした。第9回(2005年1月)以降は冬季の積雪を避け、観音峠から北上し、小野村割岳(932m)が終了点となった。

周知のとおり、近畿地方の北中部より北東部は重畳とした山並みが続くが、険しい山岳地帯ではない。標高も踏査区間は1000m以下の山嶺で、里山を繋ぐ部分が多く、気負い立つことはなかった。大御影山より三重嶽、百里ヶ岳、三国岳(三国峠776m)間はブナ林が美しく、演習林の外縁である三国岳から海老坂は台杉やモミ(ツガ)の巨木に感嘆した。海老坂と園部の三国岳間はやや複雑な地形を含み、区間最低地の日吉平(205m)を通過した。全行程とも、径、踏跡、切り開きに助けられ、藪に苦勞した部分は少なかった。

若狭湾に注ぐ北川、南川、琵琶湖に流入する石田川、安曇川に始まり、由良川と大堰川などを分ける山嶺を歩く企画に、筆者は「ロマン」を感じ、全行程に参加した。主目的の「計測」もさることながら、忠実なトレースの必要な踏査に「ゲーム」としての面白さが加味された。そのため、直下に林道が敷設されている区間も、あくまで分水嶺にこだわった。

最終回には斎藤元会長も参加され、小野村割岳で横田支部長の音頭で、ささやかな乾杯をあげたが、お祭りの終わりに、メンバーは安堵と一抹の寂しさを感じたようであった。

磯部リーダーと車の移動・回収を引き受けてくれたサポート隊に深く感謝したい。(横田和雄)



支部の最終踏査となった小野村割岳で



中央分水嶺踏査



踏査率：86.1% (2005.12.25現在)
(山行報告未提出分を含めた実質的踏査率は91.3%です)
延べ789日、3894人参加

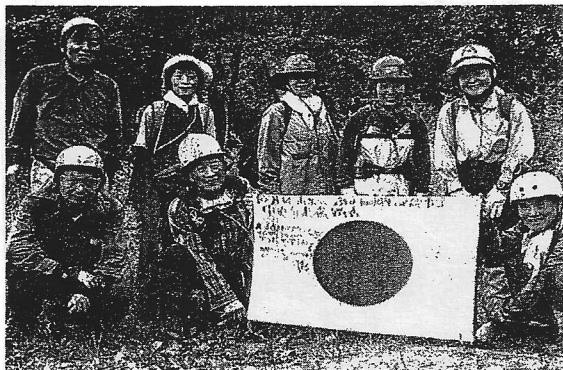
山岳地理クラブ

線の分水嶺で終わらず

山岳地理クラブの分水嶺は、福島県の甲子峠から、男鹿岳北方の大川峠までを担当した。この野岩国境の多くは、もちろん踏み跡がなく、藪が続くのであるが、年齢、経験を問わず全員でヘルメットを被り猛然と突入、団結力で踏査した。

さて、このルートは登山関係はもちろんのこと、地元の人ですら知る人が少ない。その大萱峠という峠の存在を、平野彰会員が所蔵していた『岩代国若松縣第一大区全図』内から、それは戊辰戦争の時の水戸藩諸生隊の退路、明治時代初期には年に2500頭もの馬が越え、若松縣令が部下50名と越えた峠であることが判明した。

この調査過程において栃木県山岳踏査の第一人者である中村宏氏、水戸藩諸生隊の研究をされている茨城大学山下恒夫教授、地元南稜会の渡部衛氏、林野庁関東森林管理局、奥会津地方歴史民俗資料館の渡部陣一氏、山麓の栗生沢集落の方々に情報収集等でお世話になった。湯田芳博田島町長とも意見交換し、文化交流



猛烈な藪帯をこいた後の記念撮影 (大川峠にて)

等で今後前向きに行動することになった。

我々の分水嶺は日本山岳会100周年記念事業の線の踏査だけで終わらず、そこから発生した地元との交流を大切に、面での踏査を継続していく予定である。

(遠山元信)

山の自然学研究会

夏が来れば思い出す……

山の自然学研究会の担当区は首都圏1の中の、西に至仏山(2228.1m)、北に燧ヶ岳(2356m)が望める「三平峠～富士見峠～鳩待峠」、標高2000m前後で、冬季は雪に閉ざされているルートである。

「夏が来れば思い出す」の歌詞ではないが2004年4月末、さっそく冬眠中の尾瀬に向かって予備調査(2名)に出かけたが、ルートはすべて白銀の世界。夏道と分水嶺の位置関係が十分解明できなかった。

雪が消えて6月、再度調査(5名)に入り、三平峠から大清水平、皿伏山までの登山道樹木に赤テープのマーキングをしてきた。9月はさらに全ルートの登山道の必要箇所樹木マーキングと、中原山(1968.8m)および皿伏山(1916.8m)の三角点を確認して、積雪期踏査の準備(4名)を行なった。

年を越して2005年5月23日、三平峠から大清水平、皿伏山まで積雪平均1mの分水嶺を踏査(3名)した。その前後は雨天であったにもかかわらず、当日だけは快晴であった。大清水平から尾瀬沼畔に出て見ると、沼は流水が押し寄せたように凍っており、その向こうに雪に覆われた見事な燧ヶ岳を望むことができた。

驚いたことに、翌朝は沼の氷が解け去って静かな水面となっており、沼畔には5cmほどの可愛いミズバショウの花があちこちに現われていた。この時期は1日



燧ヶ岳と氷に覆われた尾瀬沼

の違いで如何に環境が激変するものかを実感した。また、稀に見る好天と絶好の残雪状態に恵まれたことに感謝する。

(関 清)

三水会

熊と遭遇、雷と雹に追われて

三水会は長野県南佐久と群馬県西上州が接する内山峠と十石峠間を分担した。水平距離にして約27kmだが、荒船山を挟んだ内山峠から田口峠までの9.5kmを除いて登山道はない。3回の踏査行で登山道のない約18kmの区間を踏査し、第4回で全区間を完了した。

第1回は2004年11月21～22日。初日は田口峠と余地峠間を3名ずつの2班で両峠から開始した。田口峠班は霊仙峰、小唐沢山と順調に進んだが、その先から猛烈な熊笹漕ぎとなった。13時を過ぎた頃、前方60m程の場所に3頭の熊を目撃した。うち2頭は小熊のようであったが、急いで藪のなかに消えたのでホッとした。余地峠班は1337.4m峰からの下りで尾根を誤ったためだいぶ時間をロスしてしまい、時間切れとなって余地峠に戻った。翌22日、4名のパーティで大上峠から1308m峰、広小屋山の肩を経て3時間程で矢沢峠に着いたが、この日はここで分水嶺を離れ、峠より急な涸れ沢を下って大上林道に出た。

第2回は2005年5月14日。7名で前年やり残した区間を終え、翌日は十石峠から北上して途中の猛烈な笹藪のなかを、GPSを頼りに雷と雹に遭遇しながら7km余を11時間の苦闘のち大上峠に抜けた。

第3回は5月29日。4名で余地峠、矢沢峠間を日帰りで踏査し、懸念されていた区間を完結した。

最終の第4回は10月1日。10名で内山峠からほぼ分水嶺上を通っている登山道をたどって荒船山、星尾峠、

御岳を経て田口峠に抜け、これをもって三水会分担の全行程を完了した。

(塩澤 厚)

九五会

浅間山噴煙を眺めながら

九五会は2004年10月2日、浅間山火山ルート地点から鼻曲峠を経て碓井峠までを、A、B 2班に分け南北から踏査した。A班10名は浅間白根火山ルートの最高地点を9時に出発した。国道146号県境までの500mは藪の中、ここから約5kmは道路上を、浅間山を背に歩き続け国境平へ着いた。休息後、登山道から外れ樫木に覆われた暗く滑りやすい急斜面を一気に登り、1383mの三角点を確認した。鼻曲山への稜線上はミズナラの樫木帯で、長野、群馬の両県側にはカラマツの植林が多い。林床には赤い小さな実をつけたチョウセンゴミシが、あちこちに見られた。13時30分、見晴らしのよい小天狗に到着した。鼻曲山頂で休息の後、鼻曲峠に向かった。ここがB班(碓氷峠～鼻曲峠)との合流地点であると共に踏査終着点となるためGPSで位置測定し、霧積温泉へ16時到着した。

B班7名は、タクシーとのトラブルがあり、国道18号線沿い碓氷峠E510地点からの出発が少し遅れた。左手に登山道入り口があったが、分水嶺筋と思われる所から数10m藪漕ぎし木洩れ日射す林に入った。1064の標識があり、しばらく歩くと登山道に出た。ここから見晴台までの4kmはほぼ登山道に沿って、ミズナラや栗林の中を歩いた。熊野神社で休憩し、鼻曲峠(霧積峠)に向かった。一の字山、留夫山を越えるアップダウンが激しい道程で1時間30分ほど遅れ、A班とは合流できなかった。

霧積温泉で体を休め、夜は総勢19名の懇親会で大いに盛り上がった。足腰の痛みは残るも、何かホットするとともに、心地よい達成感があった。

(手島一郎)



鼻曲山での記念撮影



中央分水嶺踏査



踏査率：89.0% (2006.3.1現在)
(山行報告未提出分を含めた実質的踏査率は91.3%です)
延べ936日、4981人参加

岩手支部

中央分水嶺 この2年

2004年2月の担当者会議で示された分担山域について関連支部と調整した結果、青森・秋田県境沿いの発荷峠から四角岳間は、秋田支部が担当することとした。八幡平から花山峠までの岩手・秋田両支部の共通部分については、秋田支部の提案を受けて分担山域を定めずに自由に踏査し、一定期間後に調整することとなった。席上、踏査にあたる各支部の基本的スタンスの表明を求められた。支部として積極的に取り組むが、踏査対象山域の多くが支部でも未踏の藪山であることから、従来の山行形態や会員の年齢構成などを考慮して、完全踏査の確約は保留せざるを得なかった。

この担当者会議を受けて3月7日に支部役員会を開催し、踏査2カ年計画を立案した。支部の年間行事の大半にあたる山行を分水嶺踏査にあて、とくに夏の例会として恒例となっている日本アルプス山行も、分水嶺踏査に切り替えた。

踏査の緒戦は残雪の焼石岳周辺とし、少数精鋭によって4月に栃ヶ森山、5月には大薊山に挑んだが、残

雪期ゆえの長いアプローチにてこずり、やっと「点」に到達する苦戦となった。

従来の支部山行の参加者数と同じ程度の規模で踏査できたのは、八幡平から南下して国見峠、仙岩峠を経て地森の手前までの山域であった。この区間の踏査は、悪天候による撤退や残雪期限定などの条件にも制約されて足かけ2年を要したが、分水嶺踏査の企画がなければ実現しがたかったものであり、支部活動を活性化させるうえで有益であったと思っている。しかし一方で、雨の山行中に岩場での転落事故に遭遇した。幸い事なきを得たものの、多人数による藪山山行と万一の救助体制との関連について考えさせられた。

四角岳から南下して八幡平にいたる支部単独山域や焼石岳周辺山域の難関も、会員の熱意によって「線」が延長されつつある。踏査期限が迫るなか、未踏査部分については冬季および残雪期を利用した計画を練って臨むことにしている。

(松田和弘)

山陰支部

藪から掘り出した分水嶺

2005年9月8日11時40分、分水嶺踏査が完了した。翌日の月例会で、支部長はじめ担当の委員長や集まった支部一同、大安堵した。長く重苦しい年月だった。2003年のいつ頃だったか、支部長から説明があった時、会員からは「エー、ウソー！ あんな所の踏査なんて無理。本部の現場を知らない連中が気楽に計画して、よく言うよ……」と、悲鳴があがった。それというのも支部では1989年に「山陰の百山」、1999年に「鳥取県境の山」、2000年に「美しき伯耆の滝たち」という研究誌を発行しており、その都度、今回の分水嶺である県境を踏査したいと思いながら、その困難性から断



蟻巣山にて (2005年4月25日)



犬狹峠でサポート隊とともに (2005年7月10日)

念してきた経緯があったからである。2003年には踏査の特別委員会を作るなど態勢は作られたが、動きは鈍かった。ようやく重い腰が上がったのは2005年5月から。スタートしてみれば、山域が自宅から1時間程度と近いことから能率が上がった。

当支部の分担は、地点コードW322からW403までの水平距離約136kmで、岩場はなく藪山である。踏査参加人員は延べ159人、歩行時間は延べ168時間。歩行時間による道の状況を区分すると、B-2が45%、B-3が26%であり、道がなくて藪こぎをした時間が全体の71%であった。藪は高さ2~3m、直径1~2cmの竹が密生したもので、当初の予想以上に苦しかった。それだけになおさら、今回踏査した分水嶺は、藪から掘り出した宝物のように思われるのである。

嬉しいことも多かった。登山がたくさんできた。多い時は1日おきに山に入った。分水嶺上を歩くこと自体が楽しかった。分水嶺を東から西に向かって歩いていると、右手は日本海、左手は太平洋と、両方の大海原をわが手でつかんでいるかのように思えた。日本山岳会として北海道から九州まで日本列島を大縦走しているのは、実に豪壮な気分であった。また、サポート隊の出迎えは、仲間意識が強まり、組織の有り難さを味わった。とうてい無理と思っていた分水嶺が完全に踏査でき、以前行なった山陰の百山や県境の山という点が線で繋がれた。我らの身近な山々が完全に我が物になったようで何より嬉しいかぎりである。

(藤井信一郎)

岐阜支部

足かけ3年にわたる中央分水嶺踏査完了

岐阜支部は、桧峠(岐阜県郡上市白鳥町石徹白)~宮峠(岐阜県高山市久々野町)を担当することになった。全距離77.6kmのこの区間は藪山が多い。無雪期に

少しでも踏査を進めるべく、2003年10月19日に10人ほどで委員会を立ち上げた。第1回の踏査を11月15日とし、「1180m峠~見当山(1352.1m)~蛭ヶ野分水嶺公園」の計画を立てた。早田支部長以下11名の参加があり、初めての踏査としては大成功であった。

翌年3月の残雪期には、「点名山中峠~烏帽子岳(1625.3m)~那留分岐~白尾分岐」、さらに「白尾山~鷲ヶ岳(1671.6m)~1180m峠」まで推し進めた。04年度総会懇親山行も分水嶺踏査を兼ねて「位山(1529.2m)~荏安峠」への縦走、7月には「位山~川上岳(1625.9m)~1227m峠」を踏査した。テント泊で引き続き行なった「1227m峠~パラソル峠」は、各自鉈を手に1時間に500m弱しか進まないほどの第1級の藪こぎであった。秋季懇親山行では、「桧峠~蛭ヶ野分水嶺公園」を2班に分け、山頂で握手。11月に「パラソル峠~1223m地点」をやり遂げた。05年3月の積雪期に2回に分けて「点名山中峠飛騨共同模範牧場~点名西ヶ洞」・「西ウレ峠~点名西ヶ洞」、さらに5月に「西ウレ峠~竜ヶ峰牧場」、7月には「竜ヶ峰牧場~1223m地点」までやり遂げた。

第13回目の最後の踏査は、05年9月10日に飛騨位山モンデウススキー場に集合し、「荏安峠」~「宮峠」の山行となった。22名の参加があった。荏安峠からは旧宮村が取り付けた町村界の道標が幾つかあって、比較的わかりやすくGPSを確認しながら4時間ほど最後の宮峠に下りた。やっと終わったかと思うほどの山行であった。下山後の打ち上げ会は岐阜県下呂市湯ヶ島の宿で開催した。

多くの会員・会友のおかげで足かけ3年にわたる活動を成し遂げ、10月15日の記念式典までに全行程の踏査を完了することができた。100周年記念事業の一環であったが、未知の山にも遭遇できたことは感謝に堪えない。これを機会に支部の活動をより活性化していきたいと思う。

(高木基揚)



飛騨位山モンデウススキー場の分水嶺を示す石碑の前で



中央分水嶺踏査



踏査率：94.1% (2006.4.25現在)
延べ947日、4925人参加

福島支部

俺よりひどいやブ！

県境となっているところが多い中央分水嶺だが、福島県では、それが県土のほぼ中央を貫いている。また、県内には日本海と太平洋の両方に水が流れている水源が2つある。尾瀬と猪苗代湖である。こと分水嶺に関しては、福島県はかように特異な状況にあるといえる。

他支部同様、福島支部も会員の高齢化が進んでいるため、踏査完遂に関して悲観的な意見もあった。が、ともかく「やってみっぺ (やってみよう)！」。会員の負担を軽減するべく、まず登山道が整備されていて、日帰りできるところから踏査することにした。

最初は、2004年7月25日、安達太良山から土湯峠までのルートで、御年82歳の会員を含む6名が参加した。終日雷鳴が轟くなか、何とか目的地の新野地温泉までたどり着き、露天風呂とビールで疲れを癒した。この温泉旅館のご主人も日本山岳会の会員であり、サポート要員に名を掲げることにした。

その後、同年8月、10月、11月、12月と踏査を行なったが、いずれも日帰り、参加者の足取りもゆった



楽しい？ 藪こぎの後、鶏峠直下にて

りとしたものであったので、思うように踏査距離を延ばすことができなかった。また、いずれの踏査隊も同様と思われるが、大きな障害となっているのが、藪こぎである。コースタイムの予想がまったくたらず、方向も見失いがちで、体力を消耗すること甚だしい。諏訪峠から笠ヶ森山への登りでの藪こぎの際、医師である渡辺千代蔵会員 (実はこの方が82歳) いわく、「いやあ、ここは俺よりひどいやブだあ！」。藪こぎで楽しかったことと言えば唯一これのみか！?

2005年秋からは、広く支部会員に参加を募る一方、その地域を熟知した少数の精鋭会員に踏査を依頼している。この冬の厳寒と大雪で実行が遅れ、計画を練り直しているが、本年5月にはすべて終えるよう、鋭意奮闘中である。 (武藤伸彦)

信濃支部

大物コースに脱帽

一昨年7月、山梨県清里から始まった踏査行は95%ほど消化したが、残された権兵衛峠～牛首峠は最大の難物である。地元民も営林署もここを知る人は誰もいない。2度の偵察も先の見通しは暗いが残雪期決行。経ヶ岳を登って牛首峠を目指すA班。牛首から経ヶ岳に向かうB班。共に2泊3日でドッキングを試みる。

<A班> 3月19日、重い荷物と雪に喘ぎ六合目からはワカンを着け、カラマツ林を抜けて経ヶ岳 (2296m) に午後2時30分到着。北に向かって稜線を辿り、ダケカンバの林の中に幕営。20日、「ニセ坊主」を通過し、やせた岩稜と藪こぎ。雪底に注意しながらアップダウンの激しい雪稜を進んで12時30分、坊主山 (1965m) 着。360度の眺望を堪能し、中央アルプス最北端のハイマツを確認。相変わらずのラッセルと藪こぎの連続



経ヶ岳から坊主山へのルート、左奥は御岳、右奥は穂高方面

で汗。1820mに2日目のテント。21日、雪と風の夜が明けて朝快晴。林の中を進んで1850mピークに達す。B班も苦戦連続でドッキングは交信で無理と判断、藪と腐った雪の尾根を横川谷に下る。

〈B班〉3月19日、サポート隊と別れてすぐルートを見失う。低木の密集した雪道は重荷が肩にきつい。登り通して尾根に出る。地図は役に立たず、経験と第六感が頼りか。股まで埋まる雪と藪に苦戦しながら小さなピークをいくつも越えて、1540mにテント。20日、高曇りの風のない尾根筋を進む。朝のうちは雪もクラスト気味で歩けるが、10時頃になると相変わらず股までもぐり消耗はなほだしい。夕方から雪、風も出た。1670mにテントを張る。21日、A班との交信の結果、本日のドッキングは諦める。時間が足りない。横川谷に逃げることにする。来年(2006年)同じ頃また来て100%にするつもり。山はそこにあるし、残された難物も、また楽しみでもある。雪のとけ始めた南向きの尾根を泥だらけになって進み、林道でA班に合流。ヒマラヤ経験豊かな猛者達もさすがに「今回は参った」と。

覚悟はしていたが大物コースだった。ほとんど樹林帯のため、風の通りがないので雪がしまらず歩きにくく、藪と熊笹ではワカンも使えない。また見通しが悪く現在地を確認できない苦勞も。久しぶりに充実(?)した汗苦行であった。

(中野和郎)

休山会

趣異なる山行を満喫

休山会の分担地域は、長野県と群馬県の県境になる十石峠から県境上を南に向かい、長野県と埼玉県境に入った三国峠まで、地図上の平面距離でおおよそ21kmの山嶺である。日本を代表する信濃川、利根川の2大河川と、埼玉県域は荒川の分水嶺にあたり、西はJR小海線を挟んで八ヶ岳連峰を望み、東は、日航機墜落で

有名になった御巢鷹山と隣り合っている。群馬県側は、秩父山群の最奥部にあたり、鉄道駅からも遠く、分水嶺への取り付きも急峻である。それで、小海線側からアクセスすることとなり、2004年5月、11月、2005年5月と3回に分けて踏査を実施した。踏査時期は、できるだけ多くの会員の参加を期待し、雪山と夏場の雑草繁茂を避けて決定した。

初回は、分水嶺を横切る車道である十石峠からぶどう峠までテント泊で実施し、2回目、3回目はそれぞれ前日旅館泊とした。十石峠から三国峠まで全体で、5泊8日間(山中5日間)で踏査したことになる。

最大の痛恨事は、2004年11月、第2回踏査中に、Hさんが急逝したことである(急性心不全)。長野県警のヘリコプターで身柄を収容していただいたが、レスキュー隊員の方々には、特段のお世話をかけてしまった。

踏査の5日間は、山道の状況、分水嶺へのアプローチ方法、季節、日ごとの天候等それぞれに極めて趣の異なる山行であり、参加者全員が普段の登山と別種の体験を懐かしんでいる。

(鈴木秀郎)



ぶどう峠出発地点で(2004年11月14日)

中央分水嶺踏査委員会事務局より

2004年7月号から隔月で各支部および首都圏同好会に担当していただいたこのコーナーは、今月号をもって終了します。執筆いただいた25支部および14同好会の皆様に厚く御礼申し上げます。踏査は6月17日、信濃支部との共催によるフィナーレ踏査(会報『山』4月号に案内掲載)をもって終了する予定です。その後、各山行報告書はCD-ROMに収めるとともに、同踏査プロジェクト全般の最終報告書を単行本として本年12月を目途に出版し、来年3月をもってすべての作業を完了する予定です。今後とも、会員各位のご協力を賜りたく、よろしくお願いいたします。(森 武昭)

中央分水嶺踏査完了!!

信濃支部との共催でファイナーレ踏査実施

中央分水嶺踏査委員会

「日本山岳会創立100周年記念事業の国内登山の部として計画された中央分水嶺踏査は、2004年初めに着手されました。そして、全国の25支部ならびに首都圏17の委員会・同好会の会員約1000名が参加し、完全踏査を目指して努力してきました。本日多くの会員諸兄の参加を得て、信濃支部の担当箇所である「三峰山から鷲ヶ峰」への踏査を実施しました。これをもって、北海道から鹿児島県まで約5000^キに及ぶ日本中央分水嶺踏査が完了したことを宣言いたします」

06年6月17日、初夏の夕暮れ、灰緑色に染まった八島湿原に、信濃支部分水嶺担当責任者、中野前支部長の声が響いた。2年半にわたって続けられてきた中央分水嶺踏査は、成功裏にその幕を閉じた。「無謀な計画」という声も

中央分水嶺踏査計画、その策定・実施は紆余曲折の連続だった。日本山岳会創立以来のモットーであ

る「未知のものに挑むパイオニアスピリット」を追求する機会は二世紀の今日、残念ながら、国内にそう多く残されているわけではない。

そのなかにあつて、唯一、最善のものとして企画立案されたのが、北海道は宗谷岬から九州佐多岬に至る約5000^キの中央分水嶺を、会員一人一人の足を使って線で結ぼうという壮大な計画であつた。

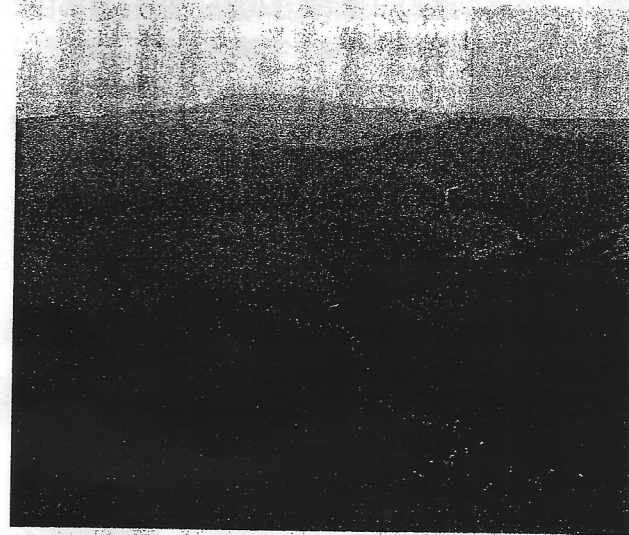
とはいえ、全体の70^{パーセント}近くは登山道がなく、GPSを駆使したとしても、ルート選定に難渋を強いられるのは明白であつた。平均年齢が60歳を超えている山岳会会員に、果たしてそれを完遂することが出来るのか。企画を知らされた支部会員から、「現場を知らない本部の連中が机上で練り上げた空論」という厳しい批判の声があつたのも、無理からぬことであつた。しかし、支部長会議などを通して、計画の意義が徐々に浸透し、04年2月21日に開催されたシンポ

ジウム、各支部の分水嶺担当者会議を経て、同事業が本格的にスタートした。

少しずつ、踏査距離を延ばす

踏査にあたり、中央分水嶺踏査委員会は全区間を27に分割し、それぞれ25地方支部（各1区間）と17の委員会・同好会（2区間を分割）に担当してもらうこととした。各支部・同好会では実行委員会等が組織され、会合に会合を重ね、緻密な計画が練られた。コースによつては、積雪期、あるいは残雪期でなければ踏査できないところ

も多く、ヒマラヤ登山経験のある会員の単独山行によつてようやく踏査された箇所もあつた（越後支部）。藪の深さにはほとんどの支部、同好会が悲鳴をあげた。2^{メートル}を超す藪に行く手を阻まれ、精根尽きて敗退すること数知れず。取材の新聞社から「ぜひ藪こぎの写真を」というリクエストも多かったが、写真を撮る余裕などなく、進むだけで精一杯のありさまだった。それでもねばり強くアタックを繰り返し、少しずつ、少しずつ、踏査距離を延ばしていった。「藪から掘り出した分水嶺（山陰支部）」という言葉が、その苦労を如実に物語っている。



三峰山から和田峠へ向かう参加者。右奥が目指す鷲ヶ峰

踏査が進むにつれ、各支部・同好会から委員会に送られてくる山行報告書も数を増した。ホームページ上の日本地図には、踏査済みを示す実線が着実に延ばされていった。04年5月31日に踏査率13



フィナーレ踏査参加者 (八島湿原にて)

踏であったものが、同年10月31日30・8割、05年6月30日67・1割、同年12月25日86・1割、06年4月25日には94・1割に達した。

分水嶺あれこれ

山国たる日本で分水嶺といえは誰しも山の尾根を思い描くが、ユニークなものも散見された。ゴルフ場の中を走っているもの(熊本支部、山梨支部)や自衛隊基地を貫いているもの(東九州支部)もあり、粘り強い交渉といった山行以外の苦労もあって、会報『山』ではその踏査顛末が紹介された。踏査中は、GPSで位置確認を行ないながら、三角点の保存状況、2

万5000分の1地形図との相違、植生などの自然環境、分水嶺にまつわる秘話などの調査もあわせ実施された。地下40メートルの深さに埋もれていた三角点を掘り出したこともあった(北九州支部)。地形図にない林道や人工建造物も、ひとつひとつ報告書に加えられ、これらは貴重な資料として国土地理院に提供されることになっている。

掘り出し物といえは、踏査をきっかけに、峠や分水嶺にまつわる水の歴史を紐解くこともあった(山形支部「横川堰」・東海支部「峠の今昔」など)。津軽海峡、関門海峡とともに海底トンネルを踏査し、北海道・本州・九州の各島をつなげたことも特筆に価しよう(北九州支部、首都圏の柳下棟生会員)。また、全踏査区間の20割にあたる1165キロを担当した北海道支部の活躍は見事なものであり、完全踏査への道を開いたといっても過言ではない。その8割が猛吹雪、滑落、雪崩の危険と真剣に向き合いながらの積雪期の踏査であった。フィナーレを飾る

6月17日、上諏訪に集合した80名は、残る最後の区間、三峰山、驚ヶ峰、八島湿原へと向かった。

分水嶺委員会および信濃支部の共催として実施されたフィナーレ山行は、北海道、東海、山梨、首都圏からの参加者で熱気溢れるものとなった。折りしも雲間から顔を覗かせた陽の光を浴びながら、参加者全員が6班に別れ、それぞれ信濃支部のリーダーに引率されてルートを踏査していった。前日の雨で登山道はかなり滑りやすくなっていたが、山座同定や植生観察しながらの山行は実に楽しく、フィナーレを飾るに相応しいものとなった。

至る所に咲いていたツツジの花は、我々を祝福してくれているかのようにであった。旧中山道の和田峠で昼食をとり、最終班が目的地の八島湿原駐車場に着いたのが15時45分。その後、中央分水嶺踏査完了の打ち上げ式が行なわれた。中野前信濃支部長の完了宣言(前述)、そして、平林副会長から「中央分水嶺をすべて踏破したことは、日本山岳会として非常に意義あること」と祝辞があった。続いて同計画策定のきっかけとなった分水嶺研究を長年続けている近藤善則会員が「私は地図の上に線を引いただけですが、皆さん一人一人が

その線を実地につないでくださいました。これは、本当に素晴らしいことだと思います」と結んだ。その後、田邊副会長の発声で高らかに乾杯し、カラカラの喉をビールで潤し、踏査完了を祝した。

「成果報告会」へ向けて

中央分水嶺全区間の踏査は、1350名(実数)の参加をもって成し遂げられた。内1043人が日本山岳会員、307人が一般からの参加者(非会員)であった。踏査山行を通じて、各支部の活動がより活況を呈してきたことは、うれしいニュースであった。なかには、中央分水嶺にとどまらず、さらに支線の分水嶺にまで踏査を広げたところもあった(関西支部)。なお、踏査完了は、参加会員の奮闘努力もさることながら、非会員、あるいは地元の方々のサポートなくしては成しえなかったことも、忘れずにおきたい。

踏査の全記録は、最終報告書およびCDに収められ、本年12月をめどに出版される。そして来年2月17日には「踏査完了フォーラム」を開催し、一人一人の足でつないだ成果を紹介する予定にしている。

(事務局長 森武昭)

「中央分水嶺踏査」事業完了！ 報告書出版記念フォーラム開催

日本山岳会創立100周年記念事業の国内登山として位置づけられた中央分水嶺踏査は、昨年11月すべて完了した。そして2月17日、報告書出版を機に、国土交通省国土地理院の後援を得て、弘済会館で記念フォーラムが開催された。

当日は、各支部の支部長・事務担当者・分水嶺担当者を合わせて150名を超える参加者が集い、熱気に包まれた。会場には日本地図上に踏査の足跡がトレースされ、数々の思い出の写真も展示された。記念フォーラムでは、次の方々から話があった。

開会挨拶 平山善吉会長

分水嶺踏査は、北海道の宗谷岬より九州の佐多岬まで約5000キロのルートに足跡を印す壮大なものである。その大部分は道無き藪漕ぎであるので、積雪期・残雪期が多かった。このイベントを無事に、成功裡に終えることが出来たことは喜びに耐えない。

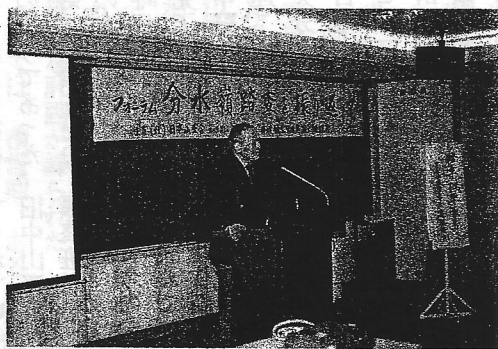
多くの苦労の中から日本の山を見直したと、山歩きの原点を再認識できたこと、全国の会員の足跡が1本の線で結ばれ、日本山岳会が強い連帯感で結ばれたことは100周年の記念碑にふさわしい。

踏査概要の報告

近藤善則 分水嶺委員

踏査は04年1月(秋田支部は前倒して03年9月から一部実施)から06年11月までの3年間で実施された。山行報告書は1032枚に達した。それを基に集計すると、参加人数1460名、延べ人数5947名、延べ歩行時間3740時間、チェックポイント1832カ所、三角点950カ所に及んでいる。

当初は完全踏査を困難視する声が多数あったため、チェックポイントだけでも踏査しようというところでスタートしたが、各支部・同好会等の取り組みが進むとともに、何とか線で結ぼうとの気運が高ま



冒頭、挨拶する平山会長

り、立ち入り禁止区域を除いて、太い1本の線で結ぶことができた。まさに、全国の会員がJACの伝統であるパイオニア精神を発揮した結果である。

地形学から見た分水界

小崎尚 明治大学名誉教授

地表に降った雨水は地表を流れるか、一度地中に浸透してもいずれ川に集まり海へと流下する。ある川に水が集まってくる範囲をその川の流域といい、流域の境界が分水界である。大きな川は山地に源流域がありその峰や山脈を分水嶺という。

地球規模の分水界(カナディア

ン・ロッキーマウンテン・アイヌスフィールド)もあるが、日本では水系が発達して分水界が確立している。そして、石灰岩地帯では地下水が山を突き抜けて流れるため分水界が複雑になるが、総じて分水嶺は分水界と同じである。

日本列島は1本の単純な弧状列島でなく6つのカマボコ島弧が繋がっている。日本の大分水界は大勢において列島のほぼ中央の脊梁山地に沿っているが、複数の島弧が交わる北海道南部、中部地方、九州では島の長軸方向と山脈が斜交していて大分水界は各山地の山稜を通らず横切るか避けて走っている。

測量、地図に関する最近の話題

津沢正晴 国土地理院測地部長

JACの分水嶺踏査完了の偉業に対して祝意を表したい。今回の分水嶺踏査で得たGPSでのデータは各地方の測定部に配布済みであり今後の活用を待っている。

最近の三角点の測量はGPSで行なっている。従来の三角測量と違って孤島の測量はいたって簡単になった(現地写真で説明)。

GPSはアメリカ空軍が運用し



熱気につつまれたフォーラム会場

ている全地球測位システムで地球の軌道上を回る複数の衛星からの電波信号を受信し、船舶、航空機が自分の位置を測定するものである。アメリカからの影響を逃れるためロシア、ヨーロッパが独自のシステムの確立に懸命である。今後どのように展開されるか興味ある問題である。

踏査記録とGPSの効用

山行報告書を読んで、今回の分

水嶺踏査ではGPSが威力を発揮していることが分かった。そこで、計測されている三角点122カ所について分析したところ、水平位置(緯度と経度)については誤差20m以内が82%、標高については誤差10m以内が90%であった。一部の操作ミスや記録間違いと思われるデータもあつたが、GPSの信頼性の高さが証明された。

ウェイポイントを山行前に登録しておく、ルート探しに有効である。使用方法を習熟すればさらに使用領域が広がるであろう。

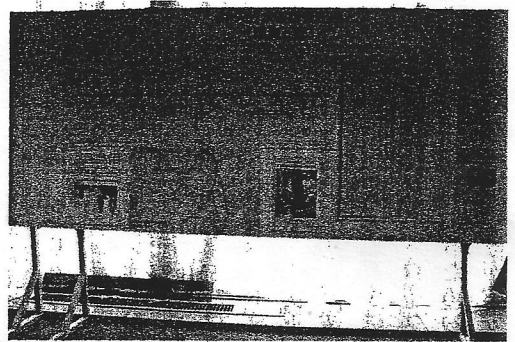
また、登山の記録として軌跡のデータを取ることによって、三次元の位置に時間を加えた四次元の記録を得る事が出来る。地形図が揃っていない海外の登山では利用価値が大きいと思われる。

〔追記〕06年10月1日マナスル登頂に成功した日本山岳会有志隊は、ベースキャンプ以降四次元の記録を残している。

出席者と語り合おう

踏査を振り返って

第2部では、藤本慶光分水嶺委員の軽妙な司会のもとで、多くの参加者から発言があり、フォーラ



会場内に展示された踏査資料

ムは盛り上がった。

最初に、全国6ブロック(北海道、東北、関東・甲信越、中部、関西・中国、九州)と首都圏I・IIの代表より感想とトピックスを披露してもらった。

ハードな山行であつたこと、山

歩きの原因に戻つたこと、未知な山が多いのを再認識したこと、達成した時の大きな喜びと仲間との連帯感が生まれたことなどが次々に報告され、いかに共有するものが多かったかを認識させられた。

トピックスとしては、分水嶺上の最高点と最低点、自衛隊基地内の踏査、分水嶺の新道作り、カルスト台地でのルート選択の難しさ、

今回対象外であつた四国・北海道東部の踏査を継続している話等々、分水嶺踏査を通じ各支部が活性化され、支部間の交流が深まったことなどが披露された。

最後に踏査報告書編集担当福山美知子委員より編集報告について話があつた後、100周年事業委員会委員長の平林克敏副会長から、今回の成果のまとめとして、「この事業の関係者が一堂に会して、やり遂げたという充実感と感動を皆様と共有することができ、感慨無量である。この事業は、百周年の基本理念である〈全員参加〉〈後世に残る事業〉へJACの伝統をいかに表現するかを登山と山岳文化の立場から実施したものであり、全会員の記憶とそれぞれの心の中で生き続けるものと思う」旨の挨拶があつた。

フォーラム終了後、引き続き同所で祝賀懇親会が開催された。

(向野暢彦、森武昭)

「追記踏査報告書を購入希望の方は事務局へFAXかハガキで申し込んでください。1200円十送料実費。10冊以上まとめて購入される場合には送料無料。

